

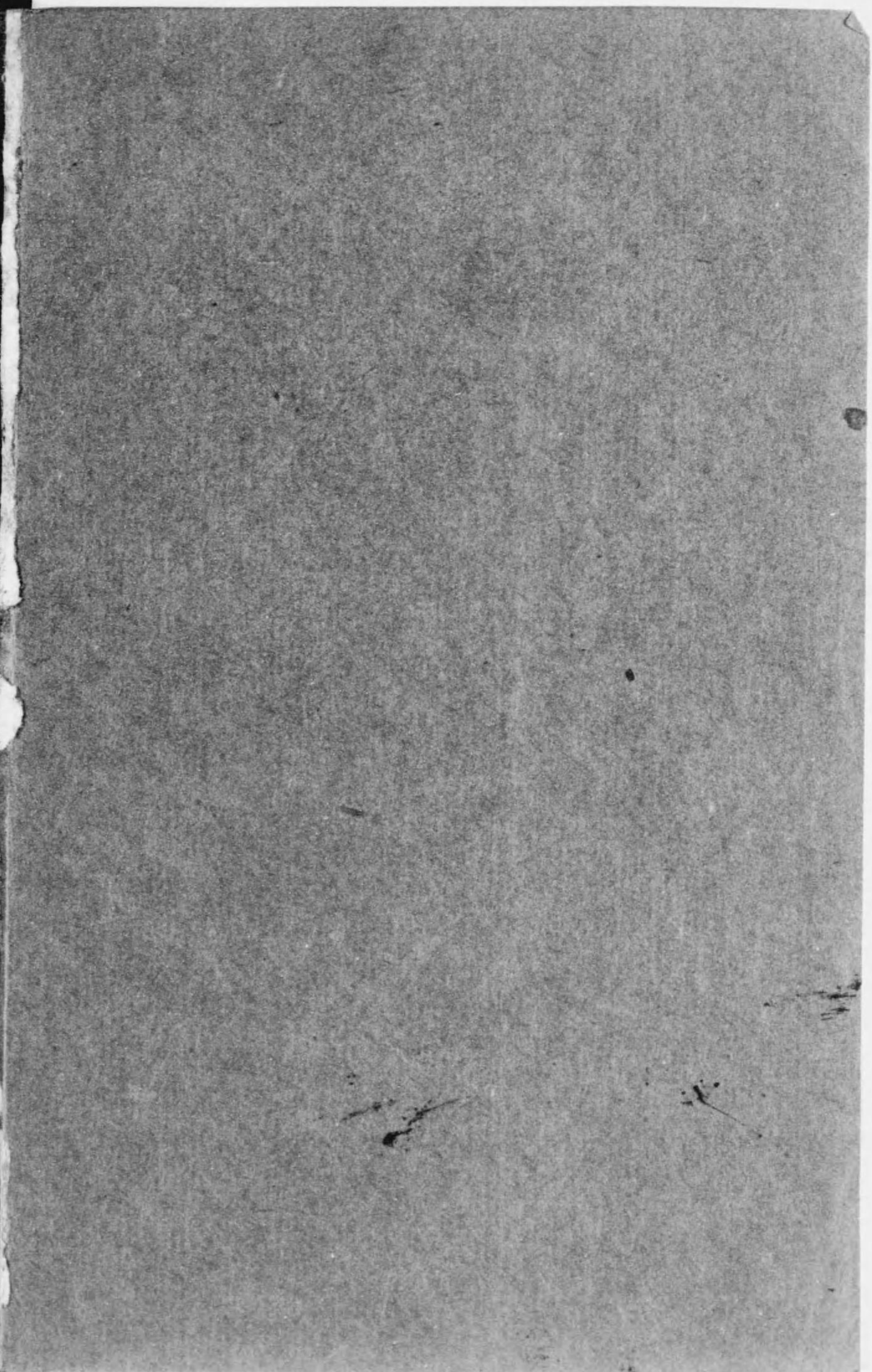
339
902



始



城戸茂種著
十六夜日記詳解



339-902
339-902.



城戸茂種著

十六夜日記詳解

東京 玉英堂發行

大正
6. 3. 30
内交

凡 例

- 一、本書は中學校、師範學校、高等女學校等に於ける上級生徒の參考用書に充てる目的を以て書いたものではあるが、同時に各種學校入學受験者の參考にもならうし、又一般國文研究者の自修用にもならうかと思ふ。
- 一、釋義を新釋と語釋とに分けて置いた。新釋は出来るだけ逐語譯の法を取つたが、歌は原意を明確にする必要上時に意譯をも敢てした。語釋はその意味の解る程度にとどめてあるが、語句によつては、精細に説明を加へたのもある。
- 一、本文は読み易いやうに、可及的に漢字を充填して振假名を施し、句讀を成るべく短く切つて置いた。

一、字句の校正については、随分嚴密に遺漏がないやうにと計つたのであるが、なほ多少の誤植があるかも知れぬ。それは再版の折を待つて訂正することを期する。

二、元來、十六夜日記には目次は立てられてないが、本書には編讀の便利を思つて、少し無理なつけ方であるが目次を拵へておいた。

一、卷首に添へた一文は、極く簡單なものであるが、この日記の由來、作者の經歷及び性行の一斑々らゐは解らうと思ふから、一通りは讀んで戴きたい。

大正六年二月

著者

目次

一	親の遺訓	一
二	數ならぬ身	三
三	和歌の道	四
四	家門の名譽	六
五	いよよ月	九
六	時雨の空	二
七	閨の枕	四
八	藻鹽草	六
九	手習の歌	九
一〇	残る撫子	三

一一	時雨の守山	二
一二	醒が井の水	六
一三	不破の關屋	〇
一四	洲俣の片淵	三
一五	鳴海 渦	三
一六	宮路山の紅葉	元
一七	有明の影	四
一八	濱松の思ひ出	四
一九	天龍の渡	七
二〇	菊川の里	九
二一	宇津の山越	五
二二	腥き夜の宿	五

(2)

二三	富士の煙	五
二四	田子の浦	九
二五	箱根 路	三
二六	浦路の霧	六
二七	月影の谷	七
二八	權中納言	七
二九	御櫛笥殿	七
三〇	姉妹への音づれ	六
三一	春の空	八
三二	忘れ 貝	八
三三	わらははやみ	八
三四	時鳥の初音	六

(3)

三五 新中納言……………七
 三六 爲相の歌……………一〇〇
 三七 爲守の歌……………一〇〇
 三八 同じながめ……………一〇六
 三九 長歌……………一〇七

(をばり)

阿佛尼と十六夜日記

「十六夜日記」は鎌倉時代末葉の人、阿佛尼の作である。作者は従五位下佐渡守平度繁の女で、はじめ順徳天皇の皇后安嘉門院邦子の方に仕へて、四條とも、右衛門佐とも云つたが、後に大納言藤原爲家に嫁して、爲相、爲守等を生んだ。爲家の歿後は佛法に歸依し剃髮して、法名阿佛、北林禪尼と號した。

夫の爲家は祖父俊成、父定家の衣鉢を傳へて、歌人としての盛名を持つてゐた。阿佛尼も亦歌道の巧者であつた。それは「續古今」「續拾遺」「新後撰」「玉葉」「續千載」の諸集に、多くの歌が採録されて居るのでも解るし、又歴代撰集の歌を批評した尼自身著、「夜の鶴」を見ても窺ふことが出来る。

爲家には先妻(宇都宮頼綱の女)の子、即ち長子爲氏があつた。正元年中爲家は書券を附して、和歌所の采邑播磨國三木郡細川庄、近江國坂田郡小野庄を爲氏に譲つたが、其の後爲氏は屢々父の意に悖るやうな不孝の行爲があつたので、爲家は細川庄を譲つたのを後悔した。そこで文永十年七月、同十一年六月の兩度に、書

券二通を阿佛尼の生んだ爲相に附して細川庄を興へることとした。然るに建治元年五月爲家は歿して仕舞つた。當時爲相は尙幼弱であつたので、長子の爲氏は、それは當然自分の所有に歸すべき性質のものであるとして、二ヶ所の領地を押領して了つた。阿佛尼はわが異腹の子爲氏の不孝不義を憤つて、遂に亡夫の遺言を楯として、朝廷に訴へたが、埒が明かない。

そこで已を得ず、時の執權職であつた北條時宗の裁判を受けようとして、建治三年十月遙々と京都から鎌倉へ下つた。それは丁度蒙古の使者杜世忠、何文著等を斬つて僅に二年の後である。その道の記及び鎌倉滞在中の日記が此の十六夜日記である。作者が筆を執つたのは弘安三年頃であらう。

○
當時は元寇の亂が將に起らうとして居て、國家多端の際であつたから、裁判は閑却されて延引又延引、四年もかゝつた。相手の爲氏も鎌倉へ呼び出された。裁判の結果はとう／＼阿佛尼の勝利に歸して、細川庄は無事に爲相の領地となつたが、阿佛尼は弘安六年九月、鎌倉の旅宿である極樂寺の境内、月影の谷で歿して了つた。享年は詳でない。其遺骸は英勝寺に葬つた。卵塔の跡は境内の北方に在つたといふ。で俗に阿佛屋敷と稱へて居るとの事である。

さて斯ういふ來歴を有つてゐる日記であるから、只漫然と行旅中の見聞や、経験した事柄を事柄として書いたものとは甚だその趣を異にしてゐる。即ち歌道を憂ひ、家系を憐れ、子女を憫み、離別を悲み、親屬を慕ひ、都を戀ひ、さては生活難に至るまでの憂愁苦悶の情が、心血と共に迸り出てゐる。月に、海に、風に、時雨に、神に、佛に、名所にまで遺る瀾ない思ひを抑へ難い紅涙と化して、世を呪つてゐる。要するにこの日記には、はじめから一篇を貫いてゐる感情がある。それが憤懣の情となり、怨嗟となり、熱涙となつたのである。それ故餘りに主觀的で時代を反映してゐない。そこに嫌い感じがある。併し同じ鎌倉時代の辨内侍日記や、中務内侍日記のやうな宮中の單調なる明昏を寫したものと違つて、日記とはいへ道の記であるから、山川風土によつて種々な印象、経験を述べてゐるので、文學としての趣味價値の多いのは云ふまでもない事である。

一文體は作者が公家方の女性であるから、固より平安朝振りの「けるとぞ」波むめり式である。鎌倉時代特有のものではない。謂はゞ土佐日記直系のもので、漢語の煩を受くる所が少ない、殆ど國文脈である。併し割合に時代の隔つた作である故か、用語には龜鑑といふのをかまへかみと譯したやうな、新しい試みもない

ではない。

文脈にも稍古格を離れたつかひさまがあつて、解し難い處は割合に少ない。行文は簡潔であるが、情意は頗る深い。すら／＼と書き流して筆に少しの滯滞がない。如何にも手際よく出来てゐる。そこに女流らしい才氣情緒の閃めきが見える。憂愁と怨恨とを突き詰めた心持で、繰返し繰返し言つてゐるので、少し冗いやうに感じながらも、知らず識らず釣込まれて同情してしまふといふ趣がある。叙景の筆には面白い節が澤山にある。

○此の日記には歌が多い。殆ど歌物語のやうなものである。その歌は織巧を極めてゐる。勿論、歌論や小詩形の研究が、此の上もなく發達した鎌倉時代のものであるから、其時代特有な縁語や、掛け詞の頗る多いのは當然である。併しそれは、單に修辭上の技巧に過ぎない。即ち技巧としての技巧のみである。そして内容には何等の新味も加へて居らぬ。父祖定家によつて代表された「新古今集」の情趣派に屬すべき歌ばかりである。即ち古枕の塵に亡夫を慕ひ、歌道に横波かくなど教へ、弦月に心細さを訴へ、立つ浪に歸洛の時を偲ぶ等、掲げ来れば全篇殆ど此類のみというていゝ位である。そして幽鬱沈痛な氣分が充ちて居ることは争はれない。

これは佛教思想の影響を蒙ることが多かつた爲めであらう。

○夜日記」といふ題號の由來は、本文の中に、「今日は十六日の夜なりけりいくて臥しぬ」とか、或は友達からの音信の中に、「ゆくりなくあくがれ出でし月や後れぬ形見なるべき」といふ歌や、又尼自身の筆に、「都を出てしは神六日なりしかばいざよう月をおぼし忘れざりけるにや」など書いてあるによそれらに基いてつけた名目であらう。併し作者自身で名づけたのでは無論後人のしわざである。そしてこの日記は、なほ阿佛尼東下り、阿佛尼海道阿佛坊道の記などいふ別名を有つてゐる。

○終りにこの日記を透して、阿佛尼その人を想像して見ると、極く勝氣な、理窟っぽい、濕ひの少ない人、そして人には敬せられるが、人に愛されぬと云つたやうな型の女性であつたらうと思はれる。一言にいふと負けぬ氣の遣手らしい。冒頭の一節で孝經を引合に出して、爲氏の暴横を責めて居るが、これなども爲氏が不孝であるといふ前に、阿佛尼自身が不慈ではなかつたらうかといふ疑はある。當時長子の爲氏と阿佛尼の生んだ爲相とは、年齢に餘程の相違があつた。夫の

爲家が老年になつて、幼い爲相を可愛がつたのは無理もない。そこに辣腕を持つた阿佛尼が、年老つた夫を旨くあやなした様な跡が見える。繼母と繼子——疑へば疑はれる餘地はある。

子故に迷ふ親心、自然といへば自然であるが、自分の生んだ子が其采邑を相續しなければ、歌道が滅亡してしまふといふ意を仄めかしてゐるが、これなどは折角同情を以て讀んだ者に、一種の反感を起させはしまいか。又、「賢王の人を捨て給はぬ政事にも漏れ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるるはなどと、暗に朝廷に訴取り上げられなハのを恨んで、一種の皮肉のやうな愚痴を洩してゐる。随分ムつた女性である。

○ 尼の著書には、この日記の他に、世々の歌集を批評した「夜の鶴」、其女組内つた消息「文庭の訓」、夫爲家の死後無常を感じて、太秦で尼となつた翌年遠つて、又更に上京したことを書いた「うたねの記」といふのがある。

十六夜日記詳解

阿佛尼作
城戸茂種譯

一、親の遣調

昔、壁の中より、もどめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上の事とは知らざりけりな。水莖の岡の葛の葉、かへすがへすも、書きおく跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。

【語釋】○壁の中よりもとめ出でたりけむ書 孝經をいふ。古文安國の序に、「魯恭王使三人壞三夫子講堂、於壁中石函、得古文孝經章」と見えたり。けむはもと過去の助動詞けり、語根に未來の助動詞む。

【新釋】昔、壁の中から探し出したとか云ひ傳へて居る考釋といふ本の名をば、今時の子供達は、少しも自分の身に關係ある事柄とは知らないで居るらしいわい。それ故、亡夫爲家卿の丁帳に書き残して置かれた証文は極めて確實であるにも係らず、御川の庄は、遂に不孝の子爲氏の爲に押領されてしまつた。あ一向效能のないものは、親の戒めである。

欠

熟したるものにして、過去の想像をあらはす助動詞。動詞並に或助動詞の第二變化に接す。「出したとかいふ」など譯すべし。

○夢ばかりも 夢程もにて、少しばかりも、僅かばかりもの意。は接尾語にして程位などの意に用ひらる。助詞としてはのみに、それだけの外にない」といふ意を示し、動詞、助動詞の第四變化に、こゝは勿論前者なり。

○けりな けりは過去の助動詞なれども、きとは甚だ趣を異にして、詠歎の意を多量に含有す。時としては、純然たる詠歎詞として用ひらるゝ事もあり。なは感動詞にて強く響かせたるなり。

○水莖の岡の葛の葉かへすがへす 書き置くの序、水莖は草などの生きくしたる莖をいひ、岡と云はんがために置きし枕詞。「水莖の岡の葛葉」と續けたる例は古歌などにも多く見ゆ。又、筆のことをも水莖といへば、下の書きおくといふ詞に應せしめたり。葛の葉は風のために、ひらくと繰り易きもの故、下の「かへすん」の序となし、「かへすがへす」に繰返し繰返し丁寧の意を兼ねしめて「書き置く」と續けたるなり。

○かきおく跡 爲家の遺書、即ち、播磨國細川莊と爲相につかはす譲り状をいふ。

○かひなき かひは詮の義、效能なしの意に解すべし。

二百九十九
すんといはこれ
いかに

欠

下

【新釋】又、大夫は側を去らずに馴れて来たのであるけれど、今度自分が關東へ行く爲に、振り捨てられようとする名残を、切に感じて、手習ひしたので見ると、

「母上は今關東をさして、旅立ちをなされるが、その行程がはる／＼と戀ひ慕はれて、明日より如何にそちらの空が、物悲しく眺められることであらう。」と書いて居る。何よりも可哀さうなので、同じ紙に、

「母と別れたというて、そんなに思ひ込んで心を痛めるなよ、さほど戀しく思ふなら、鎌倉までの道程は、遠くあらうとも、

九、手習の歌

大夫の傍に去らず馴れ來つるを、振り捨てられなむ名残、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるばると、行先遠く、慕はれて、

いかにそなたの空をながめむ。

と書きつけたる、物より殊にあはれにて、同じ紙に書きそへつ。

つくづくど、空な眺めを、こひしくば、

道遠くとも、はやかへりこむ。

とぞ思むる。

【語釋】○振り捨てられなむ名残 振りすてらるるが如き別れをいふ。

急ぎ歸つて来るから、心配せず
に居れよ。」
と、書き添へて慰めてやつた。

【新釋】 比叡山から、侍従の兄
の源承律師も見送りに来た。こ
れも誠に心細さうであつたが、
侍従の歌なんかを見て、又書き
加へた。
「別れの悲しさの故を以て、徒
らに、涙を旅衣にそそぎかけま
い、なぜならば、この旅路は、訴
訟に勝つて、年來の念願を晴ら
して立ちかへる間であるから。」

と女々しい様を、殊更に忌んで
はありながら、さすがに涙のこ
ぼるゝを隠さうと思つて、わざ
と強さうな言葉遣をして、紛ら
はすのも、色々と哀れであるの
を、慶融阿闍梨の君は、山伏で、
此人達より年長の兄であるが、
此度の道案内にお送り申さうと
いうて、出て来られたらしいの
を、此の手習にまた加はらずに
居らうかといつて、次の様に詠
んだ。
「兄弟が相互に頼みにして居る
親の守護人兼案内者として、こ
の旅行に連添ひ行くこの身は、
如何にもよろこばしさの限りで
ある。」

名残は別るゝ時の心残。
○あながち 痛切にの意。
○そなたの空 鎌倉の方向をいふ。ながむは見て物思ひに沈むこと。
○ものより殊にあはれにて 他事よりも一層あはれにての意。
○つくづく 熟思。静に物を案ずること。
○な眺めそ かな……そは「何々する勿れ」といふのを、動詞の連用段(加
變佐變は將然段)を中に挟みて、「な行きそ」「な忘れそ」などいふ。なは
勿れの意、そは指示して丁寧にいふ語。禁止の意を示す助詞。

山より、侍従の兄の律師も、出立見むとて、
おはしたり。それも、いと心細しと思ひたるを、
この手習どもを見て、又書き添へたり。
あだにのみ、涙はかけじ、旅衣、
心のゆきて、立ち歸るほど、
とは、言忌しながら、涙のこぼるるを、あら

らかに、物言ひ紛らはすも、さまさまあはれな
るを、阿闍梨の君は、山伏にて、この人々より
は兄なり。この度の道のしるべに送り奉らむ
とて、出で立たるめるを、この手習に、又まじ
らはざらむやはとて、書きつく。

たちそふぞ、うれしかりける旅衣、
かたみに頼む、親のまもりは。

【語釋】 ○山より云々 山は比叡山延暦寺をいふ。三井園城寺を寺とい
ふが如し。侍従の兄の律師は爲相の同母兄源承をいふ。律師は僧官の名稱。
よく律の一字を解するものをいふ。
○あだにのみ云々 訴訟に行き満足に勝ちて歸る間は無益に悲しむまじ
の意。心ゆくは満足して遺憾なきをいふにて、行く意をかねたり。立ち
裁ちと普通にて、旅衣の縁語なり。
○言忌 不祥の言を忌み避くるなり。

【新釋】女の子は澤山居ない。唯一人きりて、つひ近傍の新陽明門院に官仕して居る。この院の皇女御一方がお生れになつたばかりで外に心を勞する程の事もない。この女(紀内侍)は心掛

○あらゝかに物言ひ紛らはす。實は悲しきを態と勇ましげに物などいひて紛らはすこと。
○阿闍梨の君。爲家の子、名を慶融といふ。阿闍梨は釋氏要覽に、阿闍、寄歸傳云、梵語、阿遮梨那唐言軌範とあり。軌範又は正行の義。弟子を糾正する故なりといふ。僧の官名。
○山伏。山野に起臥して、佛道を修し加持祈禱などをするものをいふ。
○まじらはざらむやは。やはは反語の助詞。俚言「仲間に入らずにあらうかい」の意。
○立ちそふそ。立ちを裁ちを兼ね、立ちは旅に、裁は衣にかゝる縁語。立添ふにて同行の意を含む。
○かたみに。互にといふに同じ。

十、残る撫子

女の子はあまたもなし。唯一人にて、この近きほどの女院にさぶらひ給ふ。院の姫宮、一所生れ給ふばかりにて、心づかひもまことしきさ

けも正しいやうで、極く温順であるから、それにつけても、姫宮の戀しいといふことも同時に申し送つた際、かの幼い男の子等の世話を頼む旨を委細書きつけて、其末に、

「御身を見立て、旭の光と頼まうと思ふから、自分が立ち去つた後で、都に残つて居る撫子共(子供達)を、霜にからさない様、愛撫して下さい。」
としてやつた處が、返事も大層くはしく、誠に憐れげに書いて、歌の返しは次の様であつた。
「母上が、かほどに何くれと思ひおかれる、その深き御心が留めてあつたならば、如何程霜が降つたとて、大和撫子の枯れる

まにて、おどなくおはすれば、宮の御方の戀しさも、かねて申しおくついでに、侍従、大夫などのこと、はぐくみおほすべきよしも、細かに書きつけて、奥に、
君をこそ、朝日と頼め、ふる里に、
残る撫子、霜に枯すな。
と聞えられたれば、御かへりもこまやかに、いどあはれに書きて、歌のかへしには、
思ひおく、心とごめば、ふる里の、
霜にも枯れじ、大和撫子。
とぞある。

【語釋】○唯一人

紀内侍のことなり。父は爲家にあらずといふ説あり。

やうな事はありますまい。」

○女院 後の佛門に入り給ひて、院號を贈られ給ひしをいふ。こゝは、
 龜山天皇の女御、新陽明門院藤原位子のこと。右大臣基平の女。
 ○一所 皇子皇女の數をとへ奉る時にいふ。
 ○さぶらひ給ふ 宮仕へすること。
 ○院の姫宮 龜山天皇の皇女。
 ○心づかひ云々 心づかひは心を用ゐること。まことしきまは實ある
 さまなり。おとなしくは穩順の意。
 ○宮の御方の戀しきも云々 姫宮の戀しき由を、豫め紀内侍を経て申し
 置くついでに、子供の事を頼むなり。
 ○君をこそ云々 朝日は霜といふに對す。君は紀内侍にて、朝日の如く
 霜を消す様に頼むといふ意。撫子は爲相、爲守の二人をさしていへるなり。
 ○聞えたらば 申しやりたればの敬語。かく敬語を用ゐるものは、紀内
 侍の宮仕してあるによる。
 ○かへし 歌の返事なり。
 ○思ひおく云々 思ひおくは心を留めて注意すること。大和撫子は唐撫
 子に對して云ひ、今の石竹をいふ。前と同じく二人の子に譬へたり。

十一、時雨の守山

【新釋】五人の子供達の歌を悉く書き續けたのも、實に馬鹿らしいけれど、親の心としては、可憐に思はれるによつて、一つも残らず書き集めたのである。こんなに氣弱くては果てしがないと思ひすげなく、振り捨て、出發した。栗田口といふ所から、車はかへした。

五つの子どもの歌、残りなく書きつづけぬるも、かつは、いどをこがましけれど、親の心にはあはれにおぼゆるままに、書き集めたり。さのみ心弱くてはいかががとて、つれなくふり捨て、栗田口といふ所より、車は返しつ。

【語釋】○五つの子ども 慶融、源承、紀内侍、爲相、爲守の五人。
 ○をこがまし 馬鹿らしの意。轉じて高ぶる、こしやく也の意に用ゐらる。をこは痴の義にて、名詞なり。をこがましはをこが形容詞として用ひられたるなり。
 ○あはれ 深く心に感ずることにて、悲哀の意のみにあらず。
 ○さのみ 俗語それほど又はそんないの意。
 ○つれなく 平氣に、強顏に、無情になどいふ意。
 ○栗田口 在山城國愛宕 京都の入口にあたる故に此名あり。今栗田口町といふ。日岡蹴上の西に接す、東國街道の要衝にして、三條筋に通ず。栗田燒の産地。

【新釋】やがて、逢坂の關を越える頃、「老少不定と云つて、何時死ぬか解らぬ上、まして旅の身であるからと、案じながらも、この坂の名の如く、又再び逢ふことも出来るといふを、心頼みにして行くのである。」野路といふ所は、今通つて来た方も、これから行く先も、まるで人が見えない。日は暮れかゝつて只さへ大層悲しいのに、時雨がしとく降りそいで居た。「故郷の事を思ひ續けて、落ちる涙に濡れる袖に、時雨さへ、かりそいで悲しくて堪らないのに、行く先遠い野路の篠原を、分け行かねばならぬとは、さて

○車はかへしつ。 都より乗り来れる牛車を此處よりかへせるなり、

程なく、逢坂の關一ゆるほごに、

定めなき、命は知らぬ、旅なれど、

又あふ坂と、たのめてぞ行く。

野路といふ所は、來し方行く先、人も見えず、

日は暮れかかりて、いと物悲しと思ふに、時雨

さへうちそそぐ。

うちしぐれ、ふる里思ふ、袖ぬれて、

今宵は、鏡といふ所に着くべしと定めつれど、

暮れはててゆきつかず、守山といふ所にどいま

りぬ。ここにも、時雨なほ慕ひ來にけり。

、心細いことである。」今夜、鏡の宿につく豫定の處、途中日が暮れて果さず、そこで守山といふ所に泊つた。ここでも時雨に逢つた。「時雨に降られ、涙に濡れたこの身に猶も袖をぬらせといふ積りで、追ひかけて、この宿にやどつたのであらうか、さても、つれない時雨ではある。」今日は十六日の夜であつた。非常に苦しんでやすんだ。

いとぎなほ、袖ぬらせとや、宿りけむ、

今日は、十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥

しぬ。

【語釋】○逢坂の關、近江國滋賀郡に在りし關所の名。往時、役人を置

きて、通行の旅人を檢せる地。土佐の傳説に、逢坂の關は、

○定めなき命、人生明日を定め難きものなればかく云へり。佛家の所謂

老少不定の命。あふ坂に逢ふの意をかけたなり。たのめは契りて行くといふ

意。

○野路、近江國栗太郡老上村野路。

○篠原、野州郡にも篠原といふがあれど、これは栗太郡なる野路の篠原

なり。

○鏡、守山、皆近江國野州郡の地名。

○うちしぐれ、故郷に時雨の降る里を言ひかけたり。

○慕ひ來にけり、時雨のなほも追ひ來るやうに云ひなせり。

○いとぎなほ云々、いといはいと約。その上に、なほ一層の意。

【新釋】翌朝は、残月の光を浴びて守山を出發し、野洲河を渡る頃、先きに行く旅人の馬蹄の響ばかり手に取るやうに聞えるが霧が深いので、姿は見えない。「秋の日は短い故、旅人は皆諸共に朝早く宿を立つて、霧の立ちこめた野洲河を、馬で打ち渡すことよ。」

十七日の夜は、小野の宿といふ所に泊る。月が出て、山の峰に立ちつゝいてゐる松の木と木の間に判然と境がついて見えて、誠に面白い。こゝはまだ容易に明けはしない頃の、霧の深く立ちこめてゐる中を、とぼく

と山路を辿つて出た。醒ヶ井といふ水は、夏ならばそのまま、むぎむぎと通り過ぎてしまはうかきつと其の水を酌んだであらう徒歩の人は、矢張り寒い時節にもかゝはず、立ち寄つて汲むやうに見える。

「この醒ヶ井の水を掬ひ上げた手で、穢れ濁つた心の内をすゝいだならば、憂世の夢が醒めて、大方心の迷も解けるであらう。」と思はれるのである。

とやは疑辭。もる山に時雨の漏るをかけたたり。

十二、醒が井の水

いまだ、月の光は、かすかに残りたる曙に、守山を出でて行く。野洲川渡るほど、先立ちて行く旅人の、駒の足の音ばかり、さやかにて、霧いと深し。

旅人は、みなもろどもに、朝立ちて、

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとどまる。月出でて、山の峰に立ち續きたる松の木の間、けじめ見えて、いと面白し。ここは、夜ふかき霧のまよひに、たどり出でつ。醒が井といふ水、

夏ならば、うち過ぎましやと思ふに、かち人は、なほ立ち寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁る心を、すすぎなば、うき世の夢や醒が井の水。

とぞ覺ゆる。

- 野州川 近江國野州郡にある川。
- さやか 分明。はつきりと。
- 小野の宿 近江國坂田郡に在り。
- けじめ 物と物と接したる境目のきはだちて、明かに見ゆる事。それより兩者の對照差別の殊に甚しく異りて目立つ事などにいふ語。差別。區別。
- 霧の迷 霧立ちて人の迷ふ程なるをいふ。
- 醒ヶ井 近江國坂田郡醒ヶ井村にあり、有名の泉。
- 夏ならば打ち過ぎましや 若し夏ならば、いかでよそに打過ぎむ、必ず立ち寄りて汲むべしと思ふなり。
- かち人 徒歩の人

【新釋】美濃の國の關の藤川を渡る頃、

「わが子供等が世に出て君に仕へ奉る事が出来るやうに仕度と思ふためになくて、外の事でもうしてこの藤川を渡つて斯んな苦しい旅をしようか。」

不破の關屋の板廂は、昔に變つたこともない。

「荒れ果て、板も破れ、屋根も損はれて、隙間の多くなつた不破の關屋には、この頃の時雨や、月の光がいかに多く漏れ込

○めり 見えありの約。物事がその様に見えると推測していふ詞。
○むすぶ手云々 むすぶは掌にて水を汲む意。浮世の夢とは現世の利欲煩惱などをいふ。

十三、不破の關屋

十八日、美濃の國、關の藤川渡るほどに、ま

づ思ひつづけける、

わが子ども、君に仕へむ、爲ならで、

不破の關屋の板廂は、今もかはらざりけり。

ひま多き、不破の關屋は、このほどの、

時雨も月も、いかにもるらむ。

關より、かきくらしつる雨、時雨に過ぎて、

降りくらしせば、路もいとあしくて、心より外に、

不破の關屋の板廂は、今もかはらざりけり。ひま多き、不破の關屋は、このほどの、時雨も月も、いかにもるらむ。關より、かきくらしつる雨、時雨に過ぎて、降りくらしせば、路もいとあしくて、心より外に、

笠縫の驛といふ所に、暮れ果てねど止まる。

旅人は簑うち拂ふ夕暮の、

雨に宿かる笠縫の里。

【語釋】○關の藤川 美濃國不破郡松尾村にある川。俚俗に藤子川といふ。多く歌詞に見ゆ。

○わが子ども云々 古今集大歌所歌に、「みの、國關の藤川たえずして君に仕へむ萬代までに」とあり。ならではならずしての意。やはは反語。

○不破の關 不破郡にあり。伊勢の鈴鹿、越前の愛發と共に日本三關の稱あり。關ヶ原の西、大關村といふが蓋此地なるべし。帝王編年記に、白

鳳二年七月、始立三不破關、美濃國不破郡とあり。關屋は關を守る番人の居る家。

○板廂 板にて造れる軒端の廂。

○今もかはらざりけり 今も昔の儘に破損して居る意。新古今集、後京

極攝政其經の歌に、「人住まぬ不破の關屋の板廂あれにし後はた、秋の風」と見えり。

○ひま多き 空隙多き粗造の建築。漏るに守るをかけたなり。

○かきくらしつる雨 一天かき曇りて、降り来る雨。

むであらうか。」
不破の關から、空を掻きくらし
て降り續いた雨は、時雨にも増
して強く、一日中降つてゐるの
で、道も大層悪く、思つたより
捗らないから、止むを得ず、日
が暮れて仕舞つた譯ではないが
笠縫の驛に泊つた。
「簑をうち掃ふばかり、強く降
る夕暮の雨の爲に、案外道は捗
らず簑に縁のあるこの笠縫の驛
に宿つたのである。」

【新釋】十九日又此處を出發。夜來の豪雨に、平野附近は、道が非常に悪くて、交通杜絶の有様なので、仕方なく水田の上をそのまゝ渡つて行つた。夜明けと共に雨は止んだ。晝時分に、通つて行く途中に、立派な目につく神社があつた。人に問ふと、結の神だといふことである。「實際に約束を結ぶといふ御名

○心より外に 案外にの意。
○笠縫の驛 美濃國安八郡に在り。今北杭瀬村の大字とす。赤坂驛の東南。驛とは馬屋の義にて、往時は街道の宿々に旅人の爲めに人足駄馬を備へたり。宿。宿場。
○旅人は云々 簑は雨を防ぐ具。簑に美濃をかけ笠縫の笠と共に雨に縁をなせり。

十四 洲俣の片淵

十九日、又此處を舟でて行く。終夜降りける雨に、平野とかやいふほど、道いとわろくて、人通ふべくもあらねば、水田の面をぞ、さながら渡り行く。明くるまに、雨は降らずなりぬ。晝つ方、過ぎ行く道に、目に立つ社あり。人に問へば、むすぶの神とぞ聞ゆるといへば、守れただ、契り結ぶの、神ならば、

を負ひ給ふ神様であるならば、多年鬱結して解けない、一家の恨みに迷はさないで、早く約束の如く怨恨を取りのぞいて私を専ら御守り下さい。」
「洲俣とかいふ河には、舟をならべ、かつらの綱であらうか、それを結びつけた浮橋がある。甚だ危険な様だけれど渡つた。此河の堤防を築いた方は非常に深く、反対側は浅いので、次の様な歌を詠んだ。
「自分はこの片淵の深きに似た深い情は持つて居ながらも、この水の堤防に塞き止められるやうに、人目堤に堰き留められて、期うした困難な旅をして、苦しい目に逢ふことであらう。」

とけぬ恨に、われ迷はさで。

洲俣とかやいふ川には、舟を並べて、まさきの綱にやあらむ、懸けとどめたる浮橋あり。いと危けれど渡る。この川、堤の方はいと深く、かたかたは浅ければ、

片淵の、深き心は、ありながら、人目づつみに、さぞせかるらむ。

假の世の、往來と見るも、はかなしや、身をうき舟を、うき橋にして、とぞ思ひ續けける。又、一の宮といふ社を過ぐ、

一の宮名さへなつかし、二つなく、

「この世は、假の世である。その假の世の往來と見るのもまた實際、はかないことであるわい。それはこの川に浮舟を連れて浮橋にした上を自分が渡つて行くのであるから。」

又、一の宮といふ社を過ぎるといふので、
「國內第一の神として崇められる一の宮といふ名を聞くことさへ誠になつかしく慕はしく思はれます。勿論二つもなく三つは猶更でない唯一の妙法蓮華經を守護せられる事であらうと思ふ故。」

三つなき法を守るなるべし。

【語釋】 ○平野 美濃國安八郡に在り。
○かや かは疑辭。やは感辭。
○さながら その儘。
○あくるままに 夜の明けはなるゝに隨ひて。
○むすぶの神 安八郡平野の庄神戸村に在り。猿田彦大神を祭るといふ。残月抄には、高皇產靈神を申すとあり。
○とけね恨 訴訟を起す程の怨にて、容易に解ぬ故かくいへり。とけぬは結ぶといふに縁ある詞。
○洲保 安八郡に在り。美濃と尾張との境を流るゝ川。壘の股とも書く。まさきの網 眞祥の菫にて作れる網なり。まさきは眞榮の義にて、霜にも枯れぬ常盤の葛なりと。一説には眞拆の意にて、その織維を裂きて衣に織りなどする故の稱なりといへり。後説宜しからむ。こゝは藤の葛などをいへるなるべし。
○浮橋 筏などの如く浮べる橋。
○人目づゝみ 人の見る目をつゝみかくすためにの意にて、堤をいひかけたなり。暗に阿佛尼自身の心事をのぶ。
○かりの世 佛教にて現世をかりの世といふ。他に永久の世ありとする

による。
○うき舟 船橋なり。船を浮べて、兩岸に繋ぎ、その上に板などを敷きならべて渡るなり。憂といふことに、浮をかけてよめるなり。
○一の宮 尾張國中島郡眞墨田神社。大已貴命を祀る。
○二つなく三つなき法 佛法をいふ。法華經方便品に、「十方世界中、尙無二乘、何況有三、又、十方佛土中、唯一乘法、無二亦無三」とあるによりていへるなり。

十五、鳴海潟

二十日、尾張の國下戸といふ驛をゆく。よき道なれば、熱田の宮へ参りて、硯とり出で、書きつけて奉る歌、

祈るぞよ、わが思ふこと、なるみ潟、

かたひく汐も、神のまにまに。

なるみ潟、和歌の浦風へだてずは、

【新釋】 二十日、尾張の國下戸といふ驛を通つて行く。廻り道でもないから、熱田神宮に参拜して、硯を取出し、詠み認めて奉つた歌は、
「鳴海潟の汐の干満を自由自在になし給ふ神よ、何うぞ私に助力して、年來の願望を成就させて下さい、くれぐれも祈り奉ります。」
「鳴海潟に、和歌浦から吹き送る風を、立て隔てぬやうに、熱

田の宮の神様が、歌道を興み隔てる御心がないのならば、我が思ふやうに我が宿願を受納して下さるであらう。」

「満汐のさして来るやうに、ひたすら、この御社を尋ね指して来たのは、神様も私の衷情をお察しなされて、愛憐を垂れて下さるであらうと、思つたからであります。」

「雨でも風でも、皆、神の御心のまゝになさる事が出来るでせう、何うか私の前途はまだ遠い事でありますから、種々な障害のないやうに、お守り下さいまし。」

鳴海潟を通つて行く時は、丁度干潮なので、故障なく干潟を行くと、折から、濱の千鳥が澤山

に先に立つて行くのも、丁度道案内者頼の心地とする。

「自分は、この世の中に生き存らへやうとは思つてゐなかつた、まして、今この濱千鳥の案内に誘はれて旅をするなどは、全く思ひがけぬことであるわい。」
隅田川邊にこそ居つたと聞いて居たが、嘴と脚の赤い都鳥と云ふものが、此浦にもあつた。「あの嘴と脚との赤い鳥に問うて見やう、汝は私が住み飽かず立去つた都の方の鳥であらうか、あゝ都といへば懐かしい鳥の名ではあるわい。」

二村山を越えて行つたが、山も野も大變遠方で日が全く暮れ果て、仕舞つた。
「道程の遠い二村山を通り越し

おなじ心に、神もうくらむ。

みつ汐の、さしてぞきつる、鳴海潟、

神やあはれど、みるめ尋ねて。

雨風も、神の心に、まかすらむ。

わがゆくさきの、障りあらずな。

鳴海の潟を過ぐるに、潮干のほどなれば、障り

なく干潟をゆく。をりしも、濱千鳥いと多く先

立ちてゆくも、しるべ顔なる心地して、

濱千鳥、鳴きてぞさそふ、世の中に、

跡とめむとは、思はざりしを。

隅田川の渡りにこそありと聞きしかど、都鳥と

いふ鳥の、嘴と脚と赤きは、この浦にも

りけり。

言とはむ、嘴と脚とは、あかざりし、

わが住むかたの、都鳥かど。

二村山を越えてゆくに、山も野もいと遠くて、日

も暮れはてぬ。

はるばると、二村山を、ゆきすぎて、

なほ末たざる、野邊の夕闇、

八橋にとどまらむといふ。暗きに橋も見えずな

りぬ。

ささがにの、くもで危き、八橋を、

夕暮かけて、渡りぬるかな。

【語釋】 ○下戸。尾張國中島郡に在り。下津村ともいふ。

て、野邊はもう夕闇となつたのに、まだ宿に着く事が出来ないで、野末の闇を探りゆく事よ、あゝ心細い。」
 今宵は八橋に泊らうといふ。暗いので名高い橋も見えなくなつた。
 「蜘蛛の手のやうに、流れる水の上に架けた細い危ぶないこの八橋を、夕暮に及んで、たどり渡つた。さても危険なことであつた。」

○よきぬ道 傍へ曲り入らぬ道。よきぬはよきらぬにて横ぎらぬ意。
 ○熱田の宮 愛知郡熱田に在り、今の熱田神宮なり。草薙の劍を祀る。
 明治五年官幣大社に列す。
 ○なるみ湯 愛知郡にあり。なるに願望成就の意をかけたなり。
 ○かたひく沙 湯引く沙に、方引を寄せて、味方になりて引き助くる意を含めり。
 ○まにまに 隨意。まにまに。
 ○和歌の浦風 歌道をいふ。和歌の浦は紀伊國海草郡に在り。風光の佳なること、日本三景に次ぐ。こゝは鳴海湯に對して、歌道の事を和歌の浦風といへるなり。うくらむはわが願を受くらむの意。
 ○みつ沙の云々 阿佛尼がこの地を指して來れるを、満潮のさすに譬へ海松に見る目をかけたなり。
 ○わがゆくさき 旅行の前途と生活の前途とをかねていへるなるべし。
 ○しるべ顔 嚮道して行く様の感ありて。案内者顔。
 ○跡とめむ 足跡を天下に残すこと。あととは千鳥の縁語。
 ○都鳥 鷗の一種なり。伊勢物語に在原業平が住む所を求めに、東に下りし時、隅田川にて、この鳥を見て、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしや」とよめり。こゝの文も、同書に基く所あるが如し。
 ○あかざりし 嘴と足の赤色なるに飽く意をかけ、都鳥にて都の意を示

【新釋】二十一日、八橋を立つ。誠によく晴れて居る。山には遠い野原を分けながら行く。晝頃になつて、紅葉の非常に多い山に向つて行く。風が吹いても平氣で散らずにゐる所々は、紅葉

せり。
 ○二村山 今三河國碧海郡に屬して、杳掛とよぶ。
 ○八橋 碧海郡に在り。
 ○すゑたどる 野原の果てをたどること。
 ○ささがに 小蟹にて、蜘蛛のそれに似たるより、蜘蛛の枕詞。後には轉じて、直接に蜘蛛の異名とす。
 ○くもで 蜘蛛の手の如く、幾條となく水の分派せる上に、橋板を組合せたる故にいへるならん。
 ○夕暮かけて 夕暮時に及びてなり。橋に架くといふ語あれば、兼ねていへるなり。

十六、宮路山の紅葉

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠き原野を分け行く。晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向ひて行く。風につれなきどころどころ、朽葉に染めかへてけり。常盤木ぞ

が朽葉色に染めかへて仕舞つた。そこに常盤木の類も立ちまじつて、青地の錦を見る様である。人に山の名を問へば、宮路山だといふ。時雨がよくもまあ降つた事であつたわい。その時雨が木の葉を幾度も、染めて、あの美しい錦の様な紅葉の色を元の朽葉にかへる程染め過ぎて了つた。

この山までは以前通つた覚えがあつて、それに時節までも同じ頃であるから、
「昔も秋の頃に父と共に越したこの宮路山は、昔と同じやうに、時雨ふる秋に、私と廻り逢ふ時節を、嘸、待つて居たことであらう。」

山の裾野に竹の生えて居る所

もも、立ち交りて、青地の錦を見る心地す。人に問へば、宮路山といふ。

時雨れけり、染むる千入の、はてはまた、この山までは、昔見し心地するに、頃さへかはらねば、

待ちけりな、昔も越えし、宮地山、

山の裾野に、竹のある處に、萱屋の一つ見ゆる、

いかにして何のたよりに、かくて住むらむと見ゆ。

主やたれ、山の裾野に、宿しめて、

に、萱葺の一軒屋が見える、どうして何を便りに、斯んな寂しい所に住んで居るかと思はれる。「人里離れた山の裾野の竹叢に、淋しさも忘れて住み馴らしてゐる庵の主人は、そも誰であらうか、まあ。」

日は入りはてて、なほ、物のあやめも分かぬほどに、渡津どかやいふ所にとどまりぬ。

【語釋】○山遠き原野。山が遠くに見ゆる原野。
○風につれなき。風吹けど、平氣にて散らで残り居る紅葉。つれなきは氣強く、知らぬ顔して居る意。
○朽葉に染めかへてけり。朽葉は赭黄色をいふ。染めかへは變色せるなり。てけりは現在完了つ、の連用段に過去のけりの添はりて出来たる過去完了。過去完了にはてき、にも、にけりなどあり。而してきの添はりたる方は、何れも純然たる過去完了にして、けりの添はりたる方は、何れも味歎の意を含めり。
○青地の錦。青色の織地に、數種の色を雜へて織りたる錦。夫木抄の歌に、「いなり山杉間の紅葉きて見ればたゞ青地なる錦なりけり。」とあり。
○宮路山。三河國寶飯郡にあり。躬恒家集に、「名にし負はゞ遠からねども宮路山越えむ手向の幣にせよきみ。」赤坂驛の邊より長澤驛を経て額田郡二村の山中に至る嶺をいふ。
○千入。何度も染めて色の濃くなるをいふ。色を染むる度數をいふ語。

【新釋】二十二日の夜明方、暗
い中に、有明の月影を踏んで立
つた。いつにまして、何となく
物悲しい。

「都にも住みわびて、東路さし
て旅に出たのであるが、身の憂
きは、月の光の離れぬやうに、
何處へ行つても避ける事は出来
ないわい。」
従者が「有明の月までが笠をぬ
された」と云ふのを聞いて、
「有明の月も、笠を着たところ
を見ると、我々旅人同様に、旅
路にお出なさることであらう。」
参道の國境なる高師の山を越え
た。海が見えるあたりは、景色
がよいが、浦風が吹き荒れて、
松風の響は物凄く、浪が非常に
高い。
「自分の物思ひによつて、袖に
涙のかゝらぬ目とては一日もな
い、この高師の濱に立つ浪の高

一しほ二しほなど。
○色かへるまで。 朽葉色と變はるまでの意。
○昔見し。 阿佛尼曾て、父度繁と共に遠江に下りしことありたればかく
いへり。
○待ちけりな。 嗚ぞ待ち遠く思ひしことならむの意。
○同じ時雨のめぐり云々。 時雨は降りつゝ廻るものなれば、めぐり逢ふ
世の序となせり。
○いかにして何のたよりに。 如何なる事情譯合にての意。
○なほ。 こゝのなほは、ハリの意にあらず。 愈々、益々、一層にの意。
○物のあやめ。 文目、黒白の字を充つ、物の區別、物の條理、色目など
をいふ。
○宿しめて。 しめは占め領する意。我がものとして設くること。
○一むら。 一叢。一所際立つて見ゆる竹叢をいふ。
○渡津。 寶飯郡にあり。

十七、有明の影

二十二日の曉、夜深く、有明の影に出でて行く。
いつよりも物悲し。

すみ侘びて、月の都を、出でしかど、
うき身離れぬ、有明の影。
どぞ思ひつづくる、ともなる人、有明の月さへ
笠きたりといふを聞きて、
旅人の、同じ道にや、出でつらむ、
笠うちきたる、有明の月。
高師の山も越えつ。海見ゆるほど、いと面白し。
浦風あれ、松の響すごく、浪いと高し。
× 我が爲や、浪も高しの、濱ならむ、
袖の涙の、浪はやすまで。
いと白き洲崎に、黒き鳥の群れ居たるは、鶴とい
ふ鳥なりけり。

いのは、自分に同情の涙をそぐからであらう。」

大層真白な洲崎に黒い鳥の群れて居るのは鶴であつた。

「白い濱邊に墨のやうな眞黒な鶴が群れ遊んで居る景色は、實にいゝ。自分に若し寫生することが出来るなら、描いて見たいと思ふ位である。」

濱名の橋上から見渡すと群鶴が飛びかはして、水の底へも潜れば、岩の上にも居つた。

「鶴の遊んで居る洲崎の岩も私には他人ならず親しく思はれるそれは、悲愁遺る方なき落涙が常に浪立つて、袖に袂に滴るのは、あの岩越す浪のそれにも似て見馴れて居るからである。」

白はまに墨の色なる鳥つ鳥

筆も及ばず繪にかきてまし。

濱名の橋より見渡せば、鷗どいふ鳥、いと多く飛びちがひて、水の底へも入る。岩の上にも居たり。

鷗居る洲崎の岩も、よそならず、

波のかけ越す袖はみなれて。

【語釋】○有明のかけ。月は空にありながら、夜の明るるをいふ、かげは月光なり。十六日後の月をいふこともあり。残月。

○すみ侘びて。住み辛くての意。

○月の都。天上の月宮。古、月世界に都ありと考へたり。こゝは月宮に都(京都)のことをかけたるなり。

○うき身離れぬ。物憂き事が身につき纏へる如く残月凄涼の景が物悲しさをまさしめて、離れやらぬなり。たゞ興に托して旅中の苦をいへるもの。○かさきたり。月の暈したること。

○高師山。參道の國境に在り。東遊行囊抄に、「潮見坂の左、白須賀の北より橋本につゞきたる松山をいふ」とあり。和名抄には、「三河國渥美郡高蘆タカシ」と見ゆ。
○たかしの濱。高師濱。三河國にあり。
○袖の湊。筑前御笠郡にあり。涙の袖に絶えざるをいへり。湊といへるは比喩のみ。
○わがためやの歌。浪の字二つあるは、蓋し誤寫にして、上なるは風なるべしと古人いへり。
○洲崎。水の淺く土砂の現はれたるが、崎となりて海中に突出せるところ。

○鶴。水鳥にて黒く、鳥に似て嘴長く尖曲れり。
○鳥つ鳥。鳥の鳥の義。つはのに通ふ助辭。鶴の枕詞。後には直接鶴を呼べり。
○濱名の橋。遠江國濱名郡に濱名湖あり、これより海に注ぐ川にかけたる橋。現今の橋には非ず。
○よそならず。よそ事ならず、極く近く親しく思はるとの意。
○かけ越す。打ち起す。
○袖にみなれて。われも波越す岩の如く、涙のために袖を濡らし居ればの意。みなれては目に見馴るゝといふことに、水に馴るゝことをかけてい

【新釋】今宵は引馬の宿といふ所に泊つた。此邊は總じて濱松といふのである。親しいといふ程の知己の往んで居る所である。住んでゐた人で、今は故人となつた人の面影も、色々と思ひだされて、此處まで廻つて来て見た自分の生命の程も、返す／＼哀に思はれて、感慨深く、「松の影の長くかはらぬやうに昔と同じな濱松を尋ねて来て見れば、舊友は大抵死んで仕舞つてゐるから、岸に寄せ来る浪に向つて、往事を問ふのである。」その當時に見た人の子供や孫などを招いてもてなした。

へる例の文飾なり。

十八、濱松の思ひ出

今宵は引馬の宿といふ所にとどまる。此の所の大方の名をば、濱松とぞいひし。親しいいひしばかりの人々なども住む所なり。住み來し人の面影も、さまざま思ひ出でられて、又廻り合ひて見つる命のほごも、かへすがへすあはれなり。濱松の變らぬ影を、たづねきて、みし人なみに、昔をぞ問ふ。その世に見し人の子、うまごなど、呼び出でて、あひしらふ。

【語釋】○引馬の宿

遠江國敷智郡にあり。萬葉集に、「引馬野に匂ふは

二十三日、天龍川の渡して船に乗つたが、西行が奇禍にあうた事などが思ひ出されて、大變心細かつた。この渡しには、組み合せた船が一艘なので、大勢の人の往復に、渡守は休む暇もな

ぎはら入りみだれ衣にははせ旅のしるしに。」

○大方の名。大體の名にて、大名、總名。

○親しいいひし。親密といふも名のみなる人々。阿佛尼が曾て、父に誘はれて、遠江まで下りたりし時の友なるべし。

○住み來し人。多年住み來れる人の面影。

○かへすがへすあはれなり。かへすがへすは何度も思ひ返すこと。あはれは感慨深しの意。

○見し人なみに。見たる人無き故にの意。なみに浪をかけたなり。

○その世。其の當時。昔のこと。

○あひしらふ。接待。もてなすこと。

○うまご。孫なり。生み孫の略なりといふ。

○あひしらふ。接待。もてなすこと。

十九、天龍の渡

二十三日、天龍の渡といふ。舟に乗るに、西行が昔も思ひ出でられて、いと心細し、組み合せたる舟、唯一つにて、多くの人のゆききに、しかへるひまもなし。

い。「泡沫のやうなこの憂き世にあつて、人々が世を渡る有様を見給へ、丁度この川の早瀬の小舟に人を乗せて休む暇もなく立働いてゐる舟子のやうなもので、實に危く心細いものである。」今夜は、遠江國、見付の國府といふ所に泊つた。里がさびれて何となく恐ろしい氣がする。側に井戸があつた。

水の泡の、うき世に渡る、程を見よ
早瀬の小舟をもやすめず。
今宵は、遠つあふみ、見付の國府といふ所にとどまる。里あれて物恐ろし。傍に水の井あり。
誰か来て見附の里と聞くからに、いとど旅寐の空おそろしき。

【語釋】○天龍 天龍川は信濃國諏訪湖に發源し、西南流伊奈郡を経て漸く南に轉じ、本州山香の山中に入り來り、諸川を併せ、二俣以南に於て、始めて下游の平野に就き、六里掛塚に至り海に入る。諏訪湖より凡四十八里。古、麓玉川、天の中川といへり。渡は遠江國長下郡にあり。
○西行が昔 西行、天龍川を渡る時、武士と便船して、管にて打たれたる由、西行物語に見えたり。いまそを思ひいで、心細しといへるなり。
○組合せたる舟 木を組み合せて作れる船なるべし。筏か。
○さしかへるひまもなし 棹し歸るにて、棹をさして往復する間なき程、一艘にては忙しきなり。

【新譯】二十四日、晝頃に佐野の中山にかゝつた。事任とか云ふ神社附近は、紅葉が眞つ盛りで、景色がいゝ。山の陰になつて居るので、嵐も通はないから斯様に紅葉したのだと見える。深く分け入るまゝに、あちらこちららの峰の様子は、他の山とは違つて、如何にも心細く哀れな感じがする。麓の菊川といふ里に泊つた。

○水の泡云々 泡は水上に浮くものなれば、憂世に言ひかけ、世渡りの困難なる意を含めたり。
○見付の國府 磐田郡に在り。今見付町に郡役所あり。東遠に於て、掛川と相並びて大邑に推さる。
○誰か来て云々 見付は見張るといふ意。往來の人を搜索するといふ里の名をきくにより恐しく思はるゝとなり。
○聞くからに 聞く故に、聞くによりての意。

二十四日、晝になりて、佐野の中山越ゆ。事任とかやいふ社のほご、紅葉いと盛に面白し。山かげにて、嵐も及ばぬなめり。深く入るまゝに、遠近の峰續き、他山に似ず、心細くあはれなり。麓の里に、菊川といふ所にとどまる。越え暮す、麓の里の、夕闇に、

「佐野の中山を一日中越え暮して、漸く麓の里菊川へ、夕暗頃についたが、佐野の中山からは、なほ松風を吹き送つてくる。」
曉に起きて見ると、月も出て居る。

「有明の月よ、私は既う何の障もなく、あの峻しい、雲に聳える佐野の中山を越えて仕舞つたと、都の人々に告げて安心さして呉れ。」
河音が非常に凄い。

「東路にあると豫て名丈は聞いて居つた、菊川の水を今日渡らうとは思ひ掛けたことであらうか、いやいや、決してさうではない。」

松風おくる、佐野の中山。

曉起きて見れば、月もいでにけり。

雲かかる、佐野の中山越えぬとは、

都につげよ、有明の月。

河音いとすごし。

渡らむと、思ひやかけし、東路に、

ありとばかりは、菊川の水。

【語譯】○佐野の中山。日坂より菊川に至るまでの坂路五十餘町を佐野の中山といふ。其道、兩山に夾まれて、左右の谷間甚だ狭し。佐野は狭谷なるべし。其中間の山なれば狭谷の中山と名づけたるなるべし。古より佐夜、小夜など書けるは、皆、假名なり。西行の歌に、「年たけて又越ゆべし」と思ひきや命なりけりさよの中山」とあり。在小笠郡。
○事任とかやいふ社。小笠郡にある事任神社にて、大己貴神を祀れり。
○菊川。遠江國榛原郡にあり。中山の東麓、今金谷町の大字とす。本來は溪名なり。城東郡を流る、國安所の源なり。

○越え暮す。山路を越えて、日を暮すこと。
○雲かゝる。雲のかゝる程高きこと。
○思ひやかけし。やは反語にて、思ひがけぬといふ意、菊川の菊と縁語にて聞くとかけたるなり。

廿一、宇津の山越

二十五日、菊川を出でて、今日は大井川といふ川を渡る。水いとあせて、聞きしには違ひて、煩ひなし。河原幾里とかや、いとほるかなり。水の出でたらむ面影、おしはからる。

思ひ出づる、都のことは、おほる川、

宇津の山越ゆる程にしも、阿闍梨の見知りたる山伏、行きあひたり。夢にも人をなご、昔をわ

【新譯】二十五日、菊川を出つて、今日は大井川を渡つた。水が濁れて居て、開いて居たより面倒がなかつた。河原は遠く何里とか云つて、大水が出たらどんなであらうと想像される。
「大井川には、瀬の数がいくつもあつて、小石の数は幾千萬とも量り難い程あるが、自分が都の事を思ひ出すことは、大變多くつて、この限らない石の数も及ぶまいと思ふ。」
宇都の山を越える頃、阿闍梨の

知己の山伏に偶然出遭はした。兼平朝臣が、駿河なる宇都の山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。」と、詠まれた故事を殊更眞似をしたかのやうな心地がして、大層珍らしく又面白く情があつて優しくも思はれた。山伏は道を急ぐといふので多くの手紙をかく暇もないから、止むを得ぬ所、一ヶ所だけ、たよりをした。

「私の精神は夢にも見る事の出來ない遠い昔を戀ひ慕つて居る爲めに、茫然として現在にあるとも思はれぬ程、亂れて居ります。」

「宇都の山の蔦や、楓に時雨の降りかゝらぬ時でも、私の衣の袖は、落つる涙の暇も御座いま

ざと、まねびたらむ心地して、いとめづらかに、をかしくも、やさしくも覺ゆ。いそぐ道なりといへば、文も數多え書かず。唯、やむごとなき所一つにぞおとづれ聞ゆる。

わが心うつつともなし、宇津の山、

夢にも遠き、昔戀ふとて、

○ 蔦かへで時雨れぬひまも、宇津の山、

涙にそでの、色どこがるる。

今宵は、手越といふ所に止まる。何がしの僧正どかや上り給ふとて、いと人しげし。宿かりかねたりつれど、流石に、人のなき宿もありけり。

【語釋】○大井川 大堰、大猪に作る。駿遠の州堺にあたり、東海道の

せんから、袖の色がこがれるやうになります。」

今夜は手越といふ所に泊つた。某僧正とか、上洛せられるといふので、夥しい人出であつた。宿を借りかねたけれど、それとも又、客人の居ない宿もあつた。

互流なり。其源は甲信の間なる赤石山中に發し、田代川と云ひ、南流して井川の名あり。中游以下には畷大井川といふ。相賀に至り東に折れ、五里にして駿河灣に入る。水源より此に至る凡三十六里。その河流は島田、金谷の間を渡津とし、往時は橋梁の架設なかりしを以て、土人游泗して板輿を肩にして旅客を送迎す。海道一の險阻なりき。今は架橋あり。

○水いとあせて 水量大に減じたるなり。

○大井川云々 大井川に多き意をかけ、都の事を何くれと、思ひ出でらるゝこと多く、河瀬の石の数も及ばじといふ意。

○宇津山 宇都山とも書く。駿河國有度郡と志太郡との間なる界嶺にして、宇津谷と岡部驛の間を峠とす。

○阿闍梨 梵語、阿闍梨耶の略。更に略して闍梨ともいふ。軌範師、或は正行と譯す。弟子、僧俗の學解行儀を糾正指導すべき師範職なるによる。こゝは我子慶融のこと。

○夢にも人など 伊勢物語に、「駿河なる宇津の山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり」とある在原業平の歌を引きたるなり。

○やむごとなき所 止むことなき所にて、捨て置き難き許の意。轉じては貴人の許の意ともなる。

○うつつ 現、顯の字を書く。夢、幻に對して心の知覺の確實なるをいふ。

【新釋】二十六日、藥科川を渡り、息津の濱に出ると、定家卿の、「ことゝへよ思ひおきつの濱千鳥なくなく出し跡の月影」の詠が第一に思ひ浮ぶ。晝、休息した家につまらない黄楊の小枕があつた。非常に大儀なので、横になつたところが、硯もその邊近、にあつたから、枕上の襖に臥たまゝで、一首の歌を書きつけた。

「心あつてははなく、唯ほんの暫く夢見る爲の假りの借り枕だから、又の逢ふ瀬を契り結んだなど、他人にいうて呉れるなよ。」
暮近くに、清見が關を通つた。岩越す浪は白衣を着せた様に見えるが實に面白い。
「清見潟に年月を経た岩に訊ねて見よう、お前は今見るやうな白浪の濡衣を、抑も幾千度重ね着た事であるか、聞きたいものだ。」
間もなく日は全く暮れて、其附近の里に泊つた。
浦人の仕業であらうか、近隣から薫ぶり来る煙が誠にいやな匂ひがするので「夜の宿は醒し」と詠んが白樂天の詞が思ひ出され

○手越 駿河國安倍郡安倍川の西に在り。
○僧正 僧官の一。自分を正しうし、他人をも正し、克く政令を敷き、僧侶の濫行不正を正すをその職とす。本邦にてはこの職にある僧は、初一人に限られしが後、大僧正、僧正、權僧正の三人となり、漸次にその數を増加せり。
○さすがに 「さうはいふものゝ然しながら」の意。今は轉じて、専ら「よくその本領を發揮してゐる」といふ様な場合に使ふ。

廿二、 腥き夜の宿

二十六日、藥科川とかや渡りて、息津の濱に打ち出づ。なくなく出でしあどの月影など、先づ思ひ出でらる。晝立ち入りたる所に、あやしき黄楊の小枕あり。いと苦しければ、打臥したるに、硯も見ゆれば、枕の障子に臥しながら書きつけつ、

○なほざりに、みるめばかりを、かり枕

結びおきつと、人に語るな。

暮れかかる程、清見が關を過ぐ、岩越す波の、白き衣をうち着たるやうに見ゆる、いとをかし。

清見潟、としふる岩に、こと問はむ、

浪のぬれ衣、いくかさねきつ。

程なく暮れて、その邊の海近き里にどどまりぬ。

浦人の爲業にや、隣より薫りかかる煙、いとむ

づかしき匂ひなれば、夜の宿醒しといひける人

の詞も思ひ出でらる。夜もすがら、風いとあれ

て、浪ただ枕の上に立ちさわぐ、

ならはすよ、よそに聞きこし清見潟

る。終夜風が大變に荒れて、浪がまるで枕邊で荒れてゐるやうである。

「人傳に餘所事とばかりに聞いて居つたが、今宵清見湯で荒磯浪の枕頭に打ちかゝるやうな斯んな恐ろしい寢覺は、未だ経験した事がない。」

荒磯波のかかるねざめは

【語釋】○藥科川

安倍郡にあり。静岡の西方なる峡谷にあたり、志太郡の北とす。七峯、知者山を水源とし、南東に流れ、服織村に至り安倍川に入る。長凡七里。

○息津の濱 駿河國庵原郡にあり。今の興津町にして、沖津、奥津など書けり。庵原郡の治所とす。

○なくくいでし 新古今集定家の「言問へよ思ひおきつゝの濱千鳥なくく出し跡の月影」といふ歌思ひ出でらると也。此歌のおきつゝの濱は和泉にて所異なり。

○晝立ち入りたる所 晝休息せる宿のこと。

○あやしき黄楊の小枕 あやしきは賤しき、見苦しき意。即ち上品ならぬ黄楊の木にて作れる小さき枕。

○枕の障子 枕許にある障子。

○なほざりに云々 なほざりはいたづら、かりそめの義。見る目に、海松菜をよせ、刈に假枕をよせ、置きつゝに、息津をかけたなり。

○清見が關 庵原郡にあり。蓋し淨見崎の要害にして、後の清見寺の地か。

○浪のぬれ衣 ぬれぎぬはなき名、無實にて、冤罪の意を含めり。

○いとむづかし いぶせく、うるさしといふに同じ。
○夜の宿なまぐさし 白氏文集卷三に「朝喰飢餓我杯盤、夜宿腥臊汚牀席」とあり。
○ならはずよ云々 ならはずは馴れぬといふ意。荒磯は荒波の打ち寄する海岸。かかるは斯ると浪の打ちかゝるを言ひかけたなり。

廿三 富士の煙

富士の山を見れば、煙も立たず。昔、父の朝臣にさそはれて、如何になるみの浦なればなごよみし頃、遠つあふみの國までは見しかば、富士の煙の末も、朝夕たしかに見えしものを、何時の年よりか絶えしと問へば、さだかに答ふる人だになし。

誰が方に、靡きはててか、富士の嶺の、

【新釋】富士山を見ると今は煙も立つて居ない。昔、父の度繁朝臣に連れられて、「いかになるみの浦なれば」など、詠んだ時分、遠江の國までは見物したので、富士の煙は朝夕確かに見えたのに、何時頃から煙が絶えたのかと尋ねたが、しかと返答する人すらない。
「誰の方へ思ひを寄せてか、靡き果て、仕舞つて、富士山の煙は、斯の様に立たなくなつたの

であらう。」
古今集の序文の詞まで思ひ出されて、
「いつの昔の世の麓の塵が、この富士を雪まで高く積る山としたのであらう。」
「同じ例によく引かれる富士の煙も、立たなくなつた上からはせめて、津の國長柄の橋でも造つて欲しい。」
今宵は浪の上といふ所に泊つたが、荒浪の音に少しも寝られな

煙の末の、見えなくなるらむ。
古今の序の詞まで思ひ出でられて、
いつの世の、麓の塵が、富士のねを、
雪さへ高き、山どなしけむ。
朽ちはてし、長柄の橋を、つくらばや、
ふじの煙も、立たずなりなば。
今宵は、浪の上といふ所に宿りて、荒れたる音が、
更に目もあはず。

【語釋】○富士の山を見れば煙も立たず。富士山の、始めて噴火したるは、桓武天皇の延暦十九年三月なり。三代實錄第九に、「貞觀六年秋七月十七日富士山忽有二暴火」と、其後、一條天皇の長元五年及白河天皇の永保三年噴火したり。阿佛尼が初、遠江に下りし頃は、白河天皇の時噴火して尙ほ燃え居たりし時なるべし。
○父の朝臣 平度繁なり。

いかになるみの云々 續古今集の、「さてもわれいかになるみの浦なれば思ふ方には遠ざかるらむ」といふ歌を指すなり。如何になるに、鳴海をかけたなり。
○さだか 明かに。明白。
○古今の序の詞 古今集の序に、「高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまでおひのぼれる如く云々」とある是なり。
○雪さへ高き 雪さへ積る程の高き山といふ意。
○朽ちはてし長柄の橋云々 古今集の序に、「今は富士の山も煙立たずなり、長柄の橋もつくるなり云々」とあるに依りて詠めり。長柄は攝津西成郡にあり。今豊崎村と改む。日本後紀云、弘仁三年、遣使攝津造長柄橋。文德實錄云、仁壽三年、攝津國奏言、長柄三國兩河、頃年橋梁斷絶云々、長柄の橋は容易に新造すること無かりしかば、古より富士山の煙の絶えたること、橋の新造とを、一對の珍しきこととせり。長柄の橋を歌道にたとへ富士のけふりを訴訟の騒ぎにたとふ。
○浪の上 庵原郡の地名なるべし。未詳。
○荒れたる音 浪の荒るゝ音。
○目もあはず 寝られぬこと。

廿四、田子の浦

【新釋】二十七日、夜が明けはなれてから富士川を渡つた。朝の河は、誠に寒い。數へて見ると川瀬を渡つたこと既に十五に及んでゐる。
 「富士が嶺に弘く雪から、吹き下す富士川の川風の寒さで、私の旅衣の袖は冷冷として實に苦しい。」
 今日快晴であつて、田子の浦に出た。蟹どもの漁をするのを見ても、
 「農夫が田に下り立つて働くやうに、此の浦の蟹共は我心から求めて水に入るこゝ故、着物が濡れたとて、乾されぬなど、人に恨みを語つてはならない。」
 ともいひたい。伊豆の國府といふ所に泊つた。まだ夕日のあ

る内に、三島の神へ參詣するといつて、歌を詠み奉つた。
 「三島の神は、我身の上を不便であると思召下さる事と思つてひたすらに、此處まで巡つて来たので御座います。」
 「我が家には、父祖以來傳來した歌道の跡のあるを、神様は御存知で御座います。何うか御加護を願ひます。」
 「都から遙々と尋ねて来て、今越えかゝる箱根に、山の峽がいづつもあるが、そのかひあるやうに此度の訴訟に驗しがあるであらうと思はれて、頼もしいことである。」

二十七日、明けはなれて後、富士川を渡る。朝川いと寒し。數ふれば、十五瀬をぞ渡りぬる。
 さえわびぬ、雪よりおろす、富士川の、川風こほる、冬の衣手。
 今日、日いとうらかにて、田子の浦に打ち出づ。海人どものいさりするを見ても、心から、おりたつ田子の、あまごろも、ほさぬうらみど、人にかたるな。
 どぞいはまほしき、伊豆の國府といふ所に止まる。未だ夕日残るほど、三島の明神へまゐると、詠みて奉る。
 哀れどや、みしまの神の、宮柱、

唯ここにしも、めぐり來にけり。
 おのづから、傳へし跡も、あるものを、神は知るらむ、敷島の道。
 尋ね來て、わが越えかかる、箱根路を、山のかひある、しるべどぞ思ふ。
 【語釋】○富士川 富士山の西なる峽谷の水流にして、甲斐國の釜無、箱吹の二川を遠源とし、庵原郡と富士郡との間を流れて海に入る。延長四十里に近し。
 ○朝川 朝の川といふ意。
 ○數ふれば十五瀬 都を出てより、この富士川まで十五といふ多數の川を渡りしとなり。
 ○さえわびぬ云々 さえわびは餘りの寒さに苦しむ意。雪よりおろすは富士山頂より吹き下す雪おろしの意をきかせたり。衣手は袖のこと。
 ○田子の浦 庵原郡。今蒲原町の管内、吹上の邊の舊名とす。即ち富士川の河口西岸にあたる。こゝは富士郡なるべしといふ。

○いさりする 漁りわざするをいふ。
 ○心から云々 心からは自分の心よりの意。おりたつは織り裁つをかね衣の縁語とせり。田子浦に田子をよせ、あま衣と言ひ續けたるより。田子は田の業をする人にて、農夫なり。
 ○伊豆の國府 國府は王朝時代以後國衙のありたる所。後世府中とも稱す。伊豆の國府は、田方郡三島町大字三島宿なりき。
 ○三島の明神 三島驛にあり。大山祇神を祀る。明治五年官幣大社に列す。
 ○あはれとや云々 三島に見るをかけ、宮柱の縁にて、めぐるといへり。古事記に柱を廻りて契られしといふ伊邪那岐、伊邪那美二神の故事によりて詠めるならむ。
 ○傳へし跡 家傳あるをいふ。
 ○敷島の道 敷島の大和歌の道の略。歌道をいふ。
 ○箱根路 延暦二十一年五月富士山の噴火によりて足柄路を梗塞し、新に箱根路を開きしが、同二十二年五月箱根路廢れて、復足柄の舊路を通ぜり。中世以後は兩路共に通じ、大小公利の別なく往来あり、元和四年、箱根に大路を開きて海道の官路と定めてより、足柄路は間道となる。何れも海道の天險にして、關所の設ありき。
 ○山のかひ 峽の字を訓じ、山と山との間をいふ。これに甲斐をかねて

【新釋】二十八日、伊豆の國府を出て、箱根路にかゝつたのであるが、まだ夜更けのことであつたので、
 「箱根山を急いで行くが、まだ東天に横雲がたなびいてゐて、なか／＼夜は明けさうでない。」
 足柄山は道が遠いといふから、箱根路にかゝるのであつた。
 「かの足柄山は、其の名の悪しといふから、彼方の悪い雲をおし遠ざけて餘所にして仕舞ふので、彼の不孝の子を、遠くおし除けられるやうに思はれて、誠にゆかしい事である。」
 非常に険しい山を下つて行く。

功益の意となせり。

廿五、箱根路

二十八日、伊豆の國府を出でて、箱根路にかゝる。未だ夜深かりければ、
 玉櫛笥、箱根のやまを、いそげども、
 なほ明けがたき、横雲の空。
 足柄山は、道遠しとて、箱根路にかかるなりけり。
 ゆかしさよ、そなたの雲を峙てて、
 よそになしぬる、足柄の山。
 いと険しき山を下る。人の足も止まり難し。湯坂とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、ま

踏み止まり難い程である。湯坂とかいふのである。やつとの事で越えて仕舞つたら、又麓に早川といふ川があつて、流れが誠に早い。其の河に多くの木が流れるので、何かと問ふと、海士が焼く藻汐木を海岸へ出さうと思つて、流して居るのだといふ事である。

「東路の峻しい湯坂を越えて見渡すと、名も早川の川の流れて澤山の藻汐木が浦の方へ流れて行くのがよく見える。」
湯坂から濱へ出たが、日暮になつたけれど、泊る所は遠方である。こゝは伊豆の大島まで見渡される海濱である。何といふ所かと尋ねたが、知つて居る者がない。たゞ漁家があるばかりである。

る。
「漁夫が住んで居る、此濱邊の名も知れない淋しい里に今宵は泊らう。」
鞠子河を非常に暗い時分に覺束なく尋ね渡つた。今夜は酒匂といふ所に泊つて、明日は愈々鎌倉へ着くといふことである。

た麓に、早川といふ川あり。まことに早し。木の多く流るるを、いかにと問へば、海人の藻汐木を浦へ出さむとて、流すなりといふ。

東路の、湯坂を越えて、見渡せば、

しほ木流るる。早川の水。

湯坂より浦に出でて、日暮れかかるに、猶どまるべき所遠し。伊豆の大島まで、見渡さるる海面を、いづことかいふと問へど、知りたる人もなし。海人の家のみぞある。

海人の住む、その里の名も、白波の、

よする渚に、宿やかからまし。

鞠子川といふ川を、いと闊くてたどり渡る。今

宵は、酒匂といふ所にどごまる。明日は鎌倉へ、
いるべしといふなり。

【語釋】○玉櫛笥 櫛箱の美稱。それより、明く、覆ふ、身、蓋、奥等の枕詞として用ひらる。こゝにては箱と承けて、箱根と續けたり。明けは箱の縁語。

○横雲の空 曉東の空に横雲の棚引ける空をいふ。

○ゆかしさよ云々 彼方の雲を隔て、悪しきをよそにしたる足柄山は

さても奥ゆかしきことよの意。山の名のあしがらに、悪しき人をよせたり。そばだては隔て傾くる意。よそは餘所他所。

○湯坂 足柄郡湯本村より西に山の尾を登り鷹栖、蘆湯を経て二子山の北西を圍繞し、箱根権現に至る山経をいふ。即ち元和四年以前の驛路とす。

東鑑治承四年十月、石橋山合戦の時「北條殿者、經宮根湯坂、欲赴甲斐國云々」

○早川 足柄郡にあり。箱根の溪流の名なり。須雲川を併せ、小田原市街の南に於て海に入る。長凡六里。其源は即ち蘆湖なり。

○藻汐木 鹽を煮る料の薪なり。

○伊豆の大島 南方海島志に「大島、南北五里、東西二里半餘」とあり。

○里の名も白浪 白浪に名も知らぬ意をいひかけたり。

○鞠子川 丸子、圓子など書く。今の酒匂川なり。富士山の東麓に發し、其源は駿河國駿東郡に屬し鮎澤川といふ。足柄山を南より東へ繞り小山驛を過ぎ、川西村に於て、河内川を合せ、南流して小田原の北東三十町の地に於て海に入る。長凡三十里。
○酒匂 今酒匂村と云ひ、河の東岸なる海濱にあり。西岸の山玉原、絹一色をも管内とす。

廿六、浦路の霧

【新釋】廿九日、酒匂を立つて濱道を長い間歩いた。今や明け離れようとする海上に、細い月が出て来た。
「波の高い浦路を辿りながら行く私の心細さを知らせやめとでも思ふのか、浪の間から細い有明の月が出て照すことよ。」
渚に打ち寄せる浪の上に、朝霧が立ち罩めて、數多の漁船が見えなくなつた。

二十九日、酒匂を出で、濱路をはるばるとゆく。明けはなる、海面を、いと細き月出でたり。浦路行く、心細さを波間より、いで、知らする、有明の月。渚に寄せかへる浪の上に、霧立ちて、許多ありつる釣舟、見えすなりぬ。あま小舟、漕ぎ行く方を、見せじとや、

「漕ぎ行く蜚小舟の面白い景色を、私に見せまいといふのか、この浦の朝霧が浪の上に立ち添うて隔てを作る事よ。さても強靱い朝霧よ。」
もう都遠く離れたのであるけれど、まだ夢の様な氣がして、實際とも思はれない。
「夫爲家在世のことならば、どうして斯んなに、遠方へ来て子供等に、心配をかける様な事をしようか、決してしない、かへすんくも悲しいことである。」

【新釋】鎌倉の寓居は、月影の谷といふ所である。海岸に近い山麓であるから、風が大變強い。山寺の傍であるから、閑靜で物

都遠く、隔たり果てぬるも、猶、夢の心地して、立ち離れ、世もうき波は、かけもせじ、昔の人の、同じ世ならば、

【語釋】○あま小舟 海人の乗りたる小船。
○立ち離れ云々 たちはなれは都遠く立ち離れての意。世によもやの意をよせたり。浮世の辛き目のこと。昔の人は亡夫爲家をいふ。かけもせじは浪を打ちかけると涙をこぼさせるとをかけて云へり。
○立ちそふ 立添ふにて、隠す意。
○見せじとや 見せまいと思つてか、多分さうだらうといふ意。

廿七、月影の谷

東にて住む所は、月影の谷とぞいふなる。浦近き山もとにて、風いとあらし。山寺の傍なれば、のどかにすこくて、浪の音、松の風絶えず。都

○空にうかれし 阿佛尼が自ら都を後に旅立ちたるを、月が空に浮かれ
出づるにたとへていへり。

廿八 權中納言

前の右兵衛督の御娘、歌詠む人にて、勅撰にも、
たびたび入り給へり。大宮の院の權中納言と聞
ゆる人、歌のことゆゑ、朝夕申しなれしかばに
や、道のほどの覺束なさなど、音づれ給へる文
に、

はるばると、思ひこそやれ、旅衣、

涙しぐるる、ほごやいかにど、

返言に、

思ひやれ、露も時雨も、ひとつにて、

【新釋】前の右兵衛督爲教の息女爲子は歌の名人で、勅撰集にも度々入撰したことがある。今は大宮院の權中納言と呼ばれてゐる。歌道の事で、朝夕親しく語りなれてゐたからでもあらうが、道中の氣遣はしさなど書いて訪ひ尋ねられた文の中に、「あなたが馴れぬ旅衣を着て、鎌倉にお下りになつた道すがらつらい事、悲しい事、寂しい事やらで、涙の雨の時雨れる時はどんなに心細く苦しい事であつたらうと、遙に思ひ遣られます」とあつたから、その返歌に、

「深い露も、強い時雨も、私の涙と皆一つになつて濡れながら遠い山路を分けて来た、私の袖の雫はどんなであらうか、幸に御推察下さい。」

又、其兄、爲兼の君からも、同様に道中氣遣はしいなど、かいで、

「あなたはこの都をば、秋の時雨ふる頃に立立されたが、今や雪降る朝な夕な寒氣も一層加はつて、嗚かし御苦しみてあらうと、遙察いたします。」

返歌は、
「私の旅路は御察しの通り長かつた爲、浦風も寒くなつて、十月の空は時雨勝ちなのに、なほその上に雪さへ降り添つて、寒さは一層激しくなりました。」

山路分け來し袖のしづくを。

この兄の爲兼の君も、同じさまに、覺束なさな

ど書きて、

ふるさとは、時雨に立ちし、旅衣

雪にやいとど、さえまさるらむ。

返し、

旅衣、浦風さえて、神無月、

時雨るる空に雪ぞ降りそふ。

【語釋】○前の右兵衛督の御娘、右兵衛督は爲家の二男なる爲教。その娘は、爲子なり。爲兼の妹に當る。右兵衛督は兵衛府の長官。左右各一人。相當は從四位下なるが、中納言、參議にて兼帶し、二位の人の任じたるが多し。その下に佐、大尉、少尉、大志、小志などあり。宣陽、陰明門以外を守衛し、行幸の時供奉する役なり。
○大宮院 藤原姑子なり。後嵯峨天皇の皇后にして、後深草、龜山兩天

【新釋】式乾門院に奉仕して、御櫛笥殿と呼ばれる人は、久我太政大臣通光卿の御娘で、この方も續後撰集を始めとして、打續いて、二度も三度も家々の打聞集の中にも、その詠歌は澤山

皇の母后、大政大臣實氏の一女。
○權中納言 宮中にての爲子の呼名なり。
○涙しぐるる 涙が時雨の如くにそそぐをいふ。
○露も時雨も 涙の意を含む。
○時雨に立ちし 時雨降る時に立出せる意。立つに裁つをかけて衣の縁語となす。
○爲兼 爲教の子なり。
○旅衣云々 衣には裏あるが故に、縁語にて浦風にかゝる。即ち浦風といふを起す爲なり。降りそふは時雨るる雨さへあるに、其の上雪さへ降りそふといふ意。

廿九 御櫛笥殿

式乾門院の御櫛笥殿と聞ゆるは、久我の太政大臣の御娘、これも、續後撰より打ちつづき、二度三度の家々の打聞にも、歌あまた入りたまへる人なれば、御名もかくれなくこそ。今は、安

入つて居る程の人であるから、其の御名も世間にかくれなく知れ渡つて居る。今では安嘉門院の御殿に、御方と尊び呼ばれて仕へて居られる。關東へ出發の前日、愈々明日だといつて、御暇乞に参つたけれど、折悪しく、かの御方は御留守であつたから今夜にさし追つた出立の事故、氣がせて、斯かる理由で遠い旅をいたしますといふ事だけでも申上げることが出来ずに、其儘急いで出發したのが氣がかりであつたから、手紙を差上げた。

嘉門院に、御方とてさぶらひ給ふ。東路思ひ立ちし明日とて、まかりまうしのよしに、北白川殿へ参りしかど、見えさせ給はざりしかば、今宵ばかりのいでたち、物騒がしくて、かくどだに聞えあへず、急ぎ出でしにも、心にかゝりて、音づれ聞ゆ。

【語釋】○式乾門院 後高倉院(高倉天皇第二の皇子守貞親王の御事)の第一の姫宮にて、四條院の准母におはし、利子と申す。
○御櫛笥殿 禁中の貞觀殿中にある殿舎の名。上藤の女房を以て、別當となし、その別當となりし女房を、やがて御櫛笥殿と呼ぶなり。もとは字の如く櫛笥の調度をおく所なりしが、後に裝束所となれり。こゝは女官の呼び名なり。拾芥抄中末に「御櫛笥殿在三貞觀殿中一以三上藤女房一爲三別當一有三女藏人二云々」と見ゆ。
○久我大政大臣 源通光にして、内大臣通親の子、寶治二年一月薨す。年六十二。

【新釋】 旅中乍ら年の暮れ行く心細き、雪の絶間なきことなど澤山かいて、
「來し方行末の事などを考へると、實際心細くなつて何うしていか解らず、唯悲歎に沈んで眺めて居ると、大空も自分の心も共にかきくれて、見てゐる中

に雲の居る遠いそなたは雪空になつて行くわい。」
と申上げた處が、すぐ其返事に（好便があつたら御消息申上げようと思つて居た内に、今日十二月廿二日、常に待つて居た御手紙に接し、誠に珍しくもあり、うれしくもあり、種々細かに申上げ度いけれど、今夜は天皇の行幸があつて混雑なため、不本意ながら思ふやうに書けず、誠に残念至極です。

○續後撰 續後撰和歌集のこと。深草天皇の建長三年、藤原爲家これを撰ず。
○打開 打ち開きたる歌を私に書き集めたる歌集をいふ。
○安嘉門院 後高倉院の第二の姫宮にて、後堀河院の准母にましまし、邦子と申す。式乾門院の妹宮なり。
○御方 何殿といふが如き尊稱なり。御方人。
○まかりまうし 暇乞をすること。別れの挨拶。
○北白川殿 山城愛宕郡にあり。安嘉門院の御在所なり。
○かくとだに聞えあへず 斯様斯様であるときへも申上げずの意。
○おとづれ聞ゆ 鎌倉より便りするなり。

草の枕ながら、年さへ暮ぬる心細き、雪のひまなさなご、書き集めて、
消えかへり、眺むる空も、かきくれて、
ほごは雲居ぞ、雪になりゆく、
など聞えたりしを、立かへりその御返言、便あ

らばど、心がけ參らせつるを、今日は師走の十二日、文待ち得て、珍らしくうれしき、まづ何事も、こまかに申したく候ふに、今宵は御方違の行幸の御上とて、まざる、ほごにて、思ふばかりもいかがど、本意なうこそ、

【語釋】 ○草の枕 草枕に同じ、旅中ながらの意。
○消えかへり眺むる 消えは雲の縁語。儼々として眺め物思ひするなり。心細きこと。
○ほごは雲 都よりの道程は遙かなりといふ意。遙かに隔れる空。
○便あらば これより「かきくらし雪ふる空云々」の歌までは御櫛笥殿の返辭なり。
○師走 陰曆十二月の事にして、年極の意。
○御方たがへ 地星の靈なる天一神といふ神、目を定めて四方を廻る。この神の居る方角を、ふさがりと云ふ。故にその方角を思ひて、他の方へ行くを方たがへといふなり。中古陰陽師などの説によりて行はれたること。
○行幸 天皇の出御を申す。

【新釋】明日御立ちとて御越し
になつた日は丁度、若し人達に
誘はれて道家卿の別荘へ紅葉見
物に行つたので、後で始めて御
來訪があつたといふ事を承りま
した。御出下さるならば、なぜ
前以て知らせて下さらなかつた
のですか、

「なみ一通りで、私の袖は濡れ
るものでせうか、豫て御出立の
日を知つて居る身なら兎に角、
平生の親しみにも反して何の音
信もして下さらなかつたではあ
りませんか、實に悲しいやら、
恨めしいやらで私の袖は夥しく
濡れることである。」

○まぎるるほどにて 混雜の際にての意。
○本意なら 本懐にあらず。心苦しく残念といふ意。

御旅明日とて、御参りありける日しも、峰殿の
紅葉見にとて、若き人々さそひにしほごに、後
にこそ斯る事ども聞え候ひしか。なごや斯くと
も、御たづね候はざりし、

ひどかたに、袖やぬれまし、旅衣、

立つ日をきかぬ、恨なりせば、

雪になりゆくど、推量りの御

返言は、

かきくらし、雪ふる空の、ながめにも、

程は雲居の、あはれをぞ知る。

さて、其後、又「雪になりゆく」
と推量した歌を詠んであげたが
其の歌の返しは、

「御推量の通り、眞暗くかきく
れて眞冬の雪空を眺めるにつけ
ても、遠いそなたの旅寝のあは
れさ、嘸かしと御同情申上げま
す。」

と書いてあれば、今度は又「立
つ日を聞かぬ」の歌に對しての
返事ばかりを差上げた。

「あなたは私が旅に立つ日さへ
も知らぬ顔をして、全く他人の
やうな振舞をしながら、今にな
つて出立の日は知らなかつたな
どと、誠心込めての御恨みは、
ちと可笑しいでは御座いません
か。」

どあれば、この度は、又、立つ日を知らぬとあ
る、御返しばかりをぞ聞ゆる、

心から、なにうらむらむ、旅衣、

立つ日をだにも知らず顔にて。

【語釋】○峯影 光明峯寺關白藤原道家公のこと。こゝは山城國愛宕郡

北白河村に在る公の別邸をいふ。

○斯る事ども 阿佛尼來訪の事など。

○などやかくと 何故に前以て出立のことを告げ給はざりしとなり。

○ひとかたに云々 ひとかたは尋常、通例の意。立つに裁つをかけ、う

らみに裏見をかけて衣の縁語とせり。

○推量の御返事 前の阿佛尼の「雪になりゆく」と推量したる歌の御返事

なり。

○ほどは雲居のあはれをぞ知る 都に居りて、遠き他國に居らるるそな

たの御辛苦を推察し奉るといふ意を、婉曲に云ひなせり。知るは一本に見

るとあり、何れにても其意味通ずべし。されど空のながめといふに對して

見るといふ方や勝れるに似たり。

【新釋】あゝ明方に、都への便りがあると聞いて、終夜寢ずに都への手紙を認めたその中に、特に親しく頼みにしあうた姉君の處へ、子供達のことを種々依頼して書いて居る間に、例の浪風の音がはげしく聞えるので今實際目前にある通りのことを書きつけた。
「沖の方から、磯を吹き越す風の烈しいのに、獨り起きて居て

都へ遣る文を書いてみると、都の事なんかと思ひ出されて、落ちる涙を拭きとどめることも出来ない、随つて澤山の手紙も書ききれない。」
又、同様に、故郷に居る戀しい妹の尼へも、書面をあげようと海藻類のはし切れを、少し包み添へて、
「旅の憂さを晴さうと思つて、徒らにこの海岸に出て海藻茹り鹽焼く慰をして居るにつけても一人戀しく思はれるのは、尼上、あなたで御座います。」

○立つ日を知らぬとある云々。御佛堂殿より「などやかく云々」たつ日をきかぬ恨云々の歌などある對しての返歌。
○心から云々。心からは心底から、本心からの意。何うらむらむは何を御恨みなさるぞよ、御身はわが出立の日を遠から御承知のくせにといふ意。この歌阿佛尼の怒りより出てしにはあらず、風流の戲言と解すべし。

三十、姉妹への音づれ

曉便ありと聞きて、夜もすがら起き居て、都の文ども書く中に、殊に隔てなく、あはれに頼みかはしたる姉君に、幼き人々のこと、さまざまに書きやるほど、例の浪風はげしく聞ゆれば唯今あるままの事をぞ書きつけける。
夜もすがら、涙も文も、書きあへず、磯こす風に、ひとり起きゐて。

又同じさまにて、故郷には、戀ひ忍ぶ妹の尼上にも、文奉るとて、磯物なごのはしはしも、いささか包みあつめて、
徒らに、海藻刈り鹽やく、すさびにも、戀ひしや馴れし里のあま人。

【語釋】○便あり。都への便宜あるなり。
○都の文。都へ遣はす文。
○姉君。阿佛尼の姉なり。中院中將とも三位入道ともいへる人なる由、下文に見ゆ。
○幼き人々。爲相、爲守をいふ。
○夜もすがら云々。かきに文を書くに涙を拂ふ意をかけたなり。風は一本浪に作る。
○妹。古くは男女通じておとらと調ず。
○磯物。磯にて取りしもの。海邊の産物。
○めかり鹽やく。海藻を刈り、鹽を焼くこと。
○すさび。氣晴し、心慰み。

○戀ひしや云々　やは感歎辭。尼に海人をかけて故郷の妹の尼の、戀しきをいへり。

程經て、このおどとひ二人の返言、いと哀れにて、見れば、姉君、

✓ 玉章を、見るに涙の、かかるかな、

磯こす風は、きく心地して、

この姉君は、中の院の中將と聞えし人の上なり、

今は三位入道とか。同じ世ながら、遠ざかり果

てて、行ひゐたる人なり。そのおどとうどの君も、

海藻刈り鹽やくとある返言、さまざまに書きつ

けて、人戀ふる涙の海は、都にも枕の下にたた

へてなど、やさしく書きて、

【新釋】餘程經つてから、この姉妹から返事が来た。誠にあはれに思はれて、開いて見ると、まづ姉君の歌は、
「あなたからの御手紙や歌を拜見するにつけ、遠い都に在りながら、磯越す風の音、波の騒ぎを、さながら聞く心地がして、玉章に涙の落ちかゝるのをとどめる事が出来ません。」
この姉君は、中の院の中將といつた人の夫人である。今は佛門に歸依して三位入道であるとか夫と共に、世に在り乍ら、俗塵を逃れて、佛道を修行して居つた人である。又妹の尼も「めか

諸共に、めかり鹽焼く、浦ならば、

✓ なかなか袖に、波はかけしを。

この人も、安嘉門院にさぶらひしなり。つつま

しくする事どもを、思ひつらねて書きたるも、い

どあはれにもをかし。

【語釋】○おととひ　姉妹をいふ。

○たまづさ　使といふ詞の枕詞。玉は美稱。づさは梓の略。弓につくる

木なれば、矢を遣るになぞらへて、使人のことにも、書狀のことにもいふ。

又梓は字を刻する木なれば、手紙のことにいふとの説もあり。

○同じ世ながら　同じく此世に生き永らへ居ながら世俗と隔たりて佛道

に歸依修行せる人なりといふ意。

○行ひ　佛道を修行すること。

○人戀ふる涙の海　古今集戀の部に、「しきたへの枕の下に海はあれど人

をみるめは生ひずぞありける」といふ、紀友則の歌あり。この意を取りて

書けるなるべし。

○たたへて　水の充滿するをいふ。

りしほやく」とある歌の返事を種々澤山書いて「尼君を戀ひ慕ふ爲めに出る涙は、海のやうに枕下に堪へて乾く間もありません」などと、實に女らしく優しく書いて、
「あなたと私と一緒に、海藻を刈り、鹽を焼いて慰む事が出来るなら、却つて袖に浪をかけたまゝいものを、斯様に離れてゐるから、戀しい涙に袖を濡らすのである。」
この人も、以前安嘉門院に宮仕した事のある人である。内々の事などを、心に思つたまゝ、遠慮なく書き續けたのも、優しく面白い。

【新釋】やがて其の年も暮れて
 建治四年の春となつた。春霞の
 四方にボウと桐引いた景色は春
 らしく、谷は傍にあるが、鶯の
 初音さへも聞えない。馴れし都
 の空は、堪へ忍びがたく、昔の
 事など戀しく思つて居る折柄、
 又都へ行く人の便りがあるとき
 いたので、例の人々に手紙を認
 め、「いさよふ月」といふ歌を寄
 越された人の許へ、
 「春の臘月夜の景色は、全く都
 の空そのままであるが、毎夜々
 々打寄せて来る物凄しい浪の音は
 都に居つた時には、聞いたこと

○なかなか 却りての意。
 ○つつましくすること 慎み憚りて隠すべき程のこと。

卅一、春の空

程なく、年暮れて、春にもなりにけり、霞こめ
 たる眺の、たざたざしさ、谷の戸は隣なれども、
 鶯の初音だにも、音づれ來ず、思ひなれにし春
 の空は、しのび難く、昔の戀しきほごにしも、又
 都のたよりありど、告げたる人あれば、例の處
 々への文書く中に、いさよふ月と、音づれ給へ
 りし人の御許へ、
 臘なる、月は都の、空ながら、
 まだ聞かざりし、波のよるよる。

もないわい。」など、埒もないこ
 とを書き送つたのに、信頼し得
 べき確かな人が持つて來て呉れ
 た御返事は、その後間もなく來
 て、取る手遅しと拜見した。
 「都も鄙も變らない月の光は、
 眺めていらしつても、住み馴れ
 ない鎌倉では、毎夜々々打寄せ
 る浪の音が激しい事ですから、
 嘸かし、御安眠も出來ないこと
 でありませう、御察し申しま
 す。」

なご、
 りしを、たしかなる所より傳りて、御返事を、
 いたう程も經ず、待ち見奉る。
 寐られじな、都の月を、身にそへて、
 馴れぬ枕の、浪のよるよる。

【語釋】 ○たどたどしさ 覺束なき意。ぼんやりとせるをいふ。
 ○谷の戸 谷の門を戸にとりなしていへるなり。後には轉じて、谷かけ
 の庵の戸、又は軒をいへり。ここは單に谷といふに同じ。
 ○思ひ馴れにし春の空 年來親しみ馴れし都の春の空の意。
 ○例の所々 紀内侍以下、前に見えたる人人をいふ。
 ○いさよふ月と云々 前にありし「ゆくりなくあくがれ出でしいさよひ
 の月や後れぬ形見なるべき」と詠みおこせたりし人にて、紀内侍をいふに
 や。
 ○浪のよるよる 浪の寄るに夜々の意かけて詠めるなり。
 ○そこはかとなき 浪のよるよる 浪の寄るに夜々の意かけて詠めるなり。
 ○そこはかとなき なにといふこともなき、とりとめなき、あてどなき
 の意。

【新釋】 權中納言の君は、餘念なく熱心に歌を詠む人であるから、昨今、習字のために書きちらした詠草を集めて差上げた。「海近い所て貝など拾ふ時も、名草の濱でないから、拾ふ甲斐のない様な心地がする。」などと詞書して、

「磯打つ浪の間斷なく碎けるやうに、私も都の事を間なく戀しく思ひつづけて居るが、さてどうしたら暫くなり」と都の事を忘れることが出来るだらうか。」

「今迄は少しも知らなかつた此處鎌倉の浦吹き渡る山風も、床しい梅が香を吹き送つて來るが其の梅が香ばかりは都のそれと變らない、さても美しい春の曙よ。」

「花曇の頃、憂く思ひに沈んで眺めて居ると、浦吹き渡る風のために、霞は吹き漂はされる春の夜の月こそ、あはれにも面白くも思はれる。」

「こゝ鎌倉の磯山風の訪づれる木々の斷間から、遠く沖の方を眺めると、鄙とはいへ春の事故白く碎ける浪さへ、咲く花の姿のやうに目に立つて見えるのが面白い。」

「都人よ、あなたは、私をお忘れなく、思ひ出して下さるなら

○たしかなる所云々 確實なる人の手より我が方に持ち來りての意。
 ○程も經ず 甚だしくは時日も經過せず。
 ○寝られじな なほ歎辭。寝られまいなといふ俚言の意なり。
 ○身にそへて 戀ひ慕ひて、身にそふる意なり。

卅二、忘れ貝

權中納言の君は、まぎるる事なく、歌をよみ給ふ人なれば、このほど手習にしたる歌ども、書きあつめて奉る。海近き所なれば、貝など拾ふよりも、名草の濱ならねば、猶なきこちしてなご書きて、

如何にして、しばし都を、忘れ貝、浪のひまなく、われぞ碎くる。
 知らざりし、浦山風も、梅が香は、

都に似たる、春のあけぼの。
 花ぐもり、ながめて渡る、浦風に、霞ただよふ、春の夜の月、
 東路の、磯山風の、たえまより、浪さへ花の、面影に立つ。
 都人、思ひも出でば、東路の、花やいかにと、音づれてまし。

【語釋】 ○權中納言の君 爲教の女、爲子なり。
 ○まぎるる事なく 他事に心の移る事なきをいふ。一意専念。熱心に。
 ○名草の濱 紀伊國名草郡にあり。多く貝を産す。名草に慰むる意をきかせたり。
 ○猶なきこちして 矢張り甲斐なき心地しての意。貝なきに甲斐なき意をもたせり。上に「貝など拾ふ」とあれば、此處には貝なきとし、貝の文字を省けり。

ば、鎌倉地方の花はどうだ、身に障りはないか位は、御尋ね下さつても、いゝてはありませんか。」

【新釋】などと、唯何となく、筆に任せて思ふままに書いたが、急用ある使だといふから、十分書き盡さぬやうにも思つたが、そのまま送つたところ、間もなく返事があつた、「日頃、御身の上を案じた事も、この此御手紙によつて、霞が晴たやうな心

○忘れ貝 蛤類の貝の名。都の思ひ出を忘るるといふ意にて書けるなり。一説にいふ、「小さき貝を拾ひて愛きを忘るるといふ心にて名づく」と見えたり。貝の一種と見るべからず」と。

○浪のひまなく云々 波の絶えず寄るが如くに、少しの暇もなく、思ひを碎くの意。くだくるは思ひ亂れて心の裂くるが如きをいふ。浪の縁語なり。

○浦山風 浦に吹きおろす風と美やましとの意を通はせたり。

○花ぐもり 花咲き匂ふ頃、空の霞立ちて曇れるやうに見ゆるをいふ。

○渡る 風の吹き渡るに日を経るの意をかけたなり。

○面影に立つ 姿の如くに。目に立つといふ意。

○まし 願望の意。

なご、唯筆にまかせて、思ふ儘に、急ぎたる使
どて、書きさすやうなりしを、また程經す返事
し給へり。日頃の覺束なさも、この文に霞晴れ
ぬる心地してなごあり。

頼むぞよ、汐干に拾ふ、うつせ貝、

地がして大いに安心しました」
などとあつた。

「汐干に拾ふ名のうつせ貝の空しい名ではなく、眞實に訴訟の途があつて、目的を達し磯浪の立ちかへるやうに、早く都へ立ち歸られる世を頼みにして、待つて居ります。」

「霞のかゝつた春の月と、私の尼上を思つて晴れやらぬ心とを比べて御覽なさい、全く同じ歎きてあります。」

「沖に立つ白浪の色と同じ様に見えて散る花を、想像するだけでさへ、私の目の前に、白浪の姿が際立つて見える。」

「東國に咲く櫻花を御覽になるにつけ、私の身を忘れないで思ひ出し下さる事なら、都の花や、

かひある浪の、立ちかへる世を。

くらべ見よ、霞のうちの、春の月。

晴れぬ心は、同じながめを。

白波の、色もひとつに、散る花を、

思ひやるさへ、面影に立つ。

東路の、櫻を見ても、忘れずば、

都の花を、人やとはまし。

【語釋】○書きさす 書き果てぬこと。かきかけ。

○霞晴れぬる 晴れぬるといはむが爲めに、霞を挿みて文飾せるなり。

○うつせ貝 實の抜けたる貝なり。

○晴れぬ心 物思ひにふさがれる心。

○ながめ 様子

○白波の云々 白き波の花と、まことの白き花とが同じ白色にて散ると續けたり。

私の身の上を御尋ね下すつても
いゝてはありませんか。」

【新釋】 三月末頃、極く軽い瘧
に罹つたものか、隔日に起るこ
と二度に及んだ。大變疲れた心
地はしたが、三度目に發るべき
日の早朝から床を離れて居て、
佛前で一心に法華經を讀んだ。
其功驗か、すつかり瘧が癒つて
仕舞つた。時しも、都への便が
あつたので、瘧病に苦しんだ事
があつたと、故郷へ知らせせてや
る序に、例の權中納言の處へ、
「旅先で病氣にかゝつて、命も危
かつた程の心細さも、さすがあ
りがたい佛の驗か、今日まで一
命は繋ぎとめた。」と記して、
「この旅先で、無情の風に誘は

○思ひやるさへ

想像するにも、現在目の前に見るが如しといふ意。

卅三、わらはやみ

彌生の末つ方、わかわかしき瘧病にや、日ませ
に起るごと、二たびになりぬ。あやしうしほれ
果てたる心地しながら、三たびになるべき暁よ
り起き居て、佛の御前にて、心を一にして、法
華經を讀みつ。そのしるしにや、名残もなく、
おちたる折しも、都のたよりあれば、かかる事
こそなご、故郷へも告げやる序に、例の權中納
言の御許へ、旅の空にて、危きほどの心細さも、
さすが御法のしるしにや、今日まではかけどご
めてと書きて、

れて甦く死んで仕舞つたら、あ
の慰みがたらに焼く海士の藻鹽
火の煙ほどにも、誰か見て呉れ
ようか、見てくれまい。」と詠み
送つたのに驚いてすぐ返事があ
つた。
「和歌の浦に年月を経てだんだ
ん光輝を添へ加へる藻鹽火は、
どんなに風が吹いても、容易の
ことでは消えません同様に、和
歌の名譽あるあなたは、決して
病死なさるやうな事は御座いま
せん。」
御經の驗の程、眞に勿體なくて
「法華經の誓は、實際頼もしい
ものに思はれて、私の身に添ふ
友のやうになつた、ありがたい
事ではある。」

いたづらに、あまの鹽焼く、煙ども、

誰かは見まし、風に消えなば。

と聞えたりしを、驚きて返事、とくし給へり。

消えもせじ、和歌の浦路に、年を経て、

光をそふる、海士のもしほ火。

御經のしるし、いとたふとくて、

たのもしな、身にそふ友と、なりにけり。

たへなる法の、花のちぎりは。

【語釋】 ○彌生の末つ方 陰曆三月の下旬。彌生は草木のいよいよ生育
する時なればならむ。

○わかわかしき 極く軽き意か。一本風わなわなしきとあり、震ふ意な
り。

○瘧病 今のオコリといふ病。和名抄に、「説文云、瘧、寒熱並作二日一發
之病也、俗云、夜夜美、一云、和良波夜美」とあり。

【新釋】 四月の上旬に、便があつたから、又權中納言の御許へ「去年の春、夏が思ひ出されて戀

しい。」などと書いて、「春は暮れ果てて夏に移り行かうといふ此頃、都の新緑の美しさも、去年御一緒に眺めた景色と變つては居らぬであらう。」
「都人は、もう薄い夏衣に着換へて、今頃は山ほととぎすの初音を聞かると待ち暮らして居るであらう。美しいことだ。」
その返事がまた来た。
「御推量の通り、草も木も、去年見たままで、露程も變りはいたしません、今年も尼上が居られぬので、何となく物足らない心地がして、悲しう御座います。」
さて、時鳥の御尋に對しては、「他の人よりも、一層苦心をして、やつと今日始めて、たつた

○日まぜ 一日置なり。隔日。
○しほれ果てたる 氣力の大きに衰へたること。憔悴。
○法華經 天台宗、法華宗にて旨と奉ずる經文。八卷あり。
○名残もなく落ちたる 跡方もなく瘧の去れるをいふ。瘧の癒ゆるを、物怪などいふものゝ様に、落つるといふ。
○しるし 功德効驗の意。
○かかる事 瘧病になやみし顛末をいふ。
○かけとどめ 今日迄は命數盡きて命を取り止めたりといふ意。
○誰かは見まし かはは反語。誰も見ぬといふこと。
○風に消えなば 無常の風。
○和歌の浦路 歌道の意を含めり。火と光と消えとは互に縁ある語。
○たのもしな 頼に思はるる意。なは咏歎の辭。
○たへなる法の花 靈妙なる法華經の誓の文句。妙法蓮華經の訓讀なり。
○ちぎり 佛が其願をきくといふ約束。誓。

卅四 時鳥の初音

卯月の初つ方、便あれば、又同じ人の御許へ、去年の春、夏の戀しさなど、書きて、

見し世こそ、變らざるらめ、暮れはてて、

春より夏に、うつるこすゑも、

夏衣、はやたちかへて、都人、

今や待つらむ、山ほととぎす。

その返事又あり。

草も木も、去年見しままに、變らねど、

ありしにも似ぬ、心地のみして、

さて、ほととぎすの御たづねこそ、

人よりも、心つくして、ほととぎす、

ただ一聲を、今日ぞききつる。

【語釋】 ○卯月の初つ方 陰曆四月の上旬。卯月は卯の花の咲く月なればいふ。

一聲を聞きました。」

【新釋】昔、彼の實方の中將が陸奥守になつて、遠く下つた時、五月頃までも時鳥の聲を聞かず陸奥から「都には聞きふるすらん時鳥關の此方の身こそつられれ。」と都へ申しやられた事がありませんよ、其の例と思ひ出でられて、此度の御消息は殊に優しく拜見しましたなどと書いてあ

る。かれこれするうちに、四月の末になつたので、時鳥のことは全く断念したのである。人傳に聞くと、比企の谷といふ所で度々啼聲がしたのを、人が聞いたなどといふをきいて、「時鳥は、比企の谷で忍んで鳴く故、その聲は極く低い、何時雲井の大空に飛び上つて、高く鳴くであらう、それと同じやうに、自分も何時勝訴になつて世に出られるであらうか。」などと、獨り考へたけれど、その効能も見えない。元來東路は陸奥まで、昔から時鳥はやたらに居ないことになつてゐるからであらう。全く鳴かぬ事なら、氣もすむけれど、稀にでも聞いた人があると云ふから、人に種

○同じ人 權中納言爲子のこと。
○見し世 去年見たる都の様なり。らめは推量の助動詞。暮れはては春の暮れ果つるをいふ。
○夏衣はやたちかへて 更衣の事。四月に春衣を夏衣に着更ふるなり。裁ち換へての意。
○ありしにも似ぬ ありしは過去のことをいふ。昔にも似ぬかはりし様なる心地。
○さて時鳥の御たづねこそ 權中納言爲子よりの詞なり。
○ほととぎす云々 阿佛尼の歌をその時鳥の鳴く音にたとへたるなり。

實方の中將の、五月まで時鳥きかで、みちのくにより、「都には、聞きふるすらむ、時鳥關のこなたの、身こそつられれ、」とかや、申されたる事の候ふなる。その例と思ひ出でられて、この文こそ、殊にやさしくなご書きて、おこせ給へり。さる程に、卯月の末になりければ、時鳥の

初音、ほのかにも思ひ絶えたり。人傳に聞けば比企の谷といふ所に、あまた聲鳴きけるを、人聞きたりなごいふをききて

しのび音は、比企のやつなる、時鳥、雲居に高く、いつかなのらむ。なご、獨り思へども、その甲斐なし。本より東路は、みちの奥まで、昔より時鳥稀なるならひにやありけむ。一すぢに、又鳴かすばよし、稀にも聞く人ありけるこそ、人わきしけるよど、心づくしにうらめしけれ。

【語釋】○實方の中將 近衛中將藤原實方なり。一條天皇の時、藤原行成と争ひて、その冠を打落しし爲、歌枕見てまわれとて、陸奥守に左遷せられし有名なる歌人。

別を置いてゐる様に思はれて、
誠にうらめしい。

【新釋】又、和徳門院に奉仕してゐる新中納言といふ人は、京極中納言定家の御娘で、深草の前齋宮と申した方の許に、父の中納言が、差上げ仕へ奉らせ

たのであつたが、そのままで年月を経過したのである。此女院は、齋宮の御養女になされたれば引續いて、此内院の御附の女房として仕へられたのである。「浮き身こがる藻刈舟」などと詠まれた、民部卿の典侍の姉に當られる方である。ある名門の人の子女で、拙い歌を詠んで、人に聞かれまいと、強ひて秘密にして居られたが、遠い旅中の身を氣遣うて、種々と親切なことを書き續けて、
「御子達の事を思はれて、丁度母鶴が可愛い雛鶴を残しおいて飛び別れるやうに、遠く都を立ち別れて馴れぬ旅の空でどの様に歎き悲しんで居られることであらう、御察し申します。」

- 關 逢坂の關。
- やさしく 優にあはれ深しとの意。
- ほのかにも云々 ちよいとでも時鳥の初音を聞かむと思ひし望絶えたりといふ意。
- 比企の谷 日蓮宗妙本寺の邊にして、比企判官能員の邸宅のありし所。在鎌倉。
- しのび音云々 地名比企に低き意をかけたなり。この歌の裏には、何時かわが訴訟の成就するならんとの意を含めり。
- 一すぢに 全く、又はキツパリトの意。
- 人わき 人によりて差別をつけ、聞く人と聞かぬ人とありしこと。人を選ぶ意。依怙。
- 心づくし ころろ深くの意。

卅五 新中納言

又、和徳門院の新中納言と聞ゆるは、京極の中納言定家の御娘、深草の前齋宮と聞えしに、父の中納言の、參らせおき給へるままにて、年經

給ひにける。この女院は、齋宮の御子にし奉り給へりしかば、傳りてさぶらひ給ふなり。「うき身こがる、藻刈舟」など、よみ給へりし、民部卿の典侍のせうとにてぞおはしける。さる人の子にて、あやしき歌よみて、人には聞かれじと、あながちに包み給ひしかど、遙なる旅の空覺束なさに、あはれなる事どもを書きつづけて、いかばかり、子を思ふ鶴の、飛び別れ、
習はぬ旅の、空になくらむ。
と、文の詞につづけて、歌のやうにもあらず、書きなし給へるも、人よりはなほざりならず覺ゆ。御返事は、

と、手紙の詞に續けて、歌の様にもせぬのは、他の人より注意深いやうで、一入奥床しく感じられた。御返事には、「御仰せの通り、悲しさは、物にも譬へやうが御座いません、子を思ふ蘆田鶴のその如く幼い子等の居る都の空が、何時も何時もやはり戀しく悲しく思はれます。」と詠み返した。

と聞ゆ。

それ故に、飛別れても、蘆田鶴の、子を思ふ方は、なほぞ悲しき。

【語釋】○和徳門院 仲恭天皇の皇女にて、義子内親王と申す。母は、順徳院の女房右京大夫なり。
○深草の前齋宮 後鳥羽天皇の皇女にて、照子内親王と申す。齋宮とは天皇歴代毎に、伊勢大神宮に差遣して、奉侍の任に當らしむる皇女若しくは女王をいふ。イツキノミヤと訓ず、又齋内親王と稱し、略して齋王とも云ひ、又御杖代とも云ふ、齋宮は居所の名、伊勢多氣郡に在るを以て「タケノミヤ」ともいふ。
○御子にし奉り云々 奉りは女院に對する敬語。給へりは朝廷の御はからひに對する敬語。女院は齋宮の御子分とならせ給ひし故に、新中納言も傳はりて女院に侍ふことゝなれりといふ意。
○うき身こがる云々 續後撰集に「濁江にうき身こがるる藻刈舟はてはゆききのかげだにも見ず」とある歌を指す。
○典侍 内侍の第二等官。尙侍をカミといへばなり。ここは右の歌の主人の呼名なり。

【新釋】 そのついでに、故入道大納言が旅寢の枕頭にも立ち添うて、夢の中に見えられた事など申し送つても、此人だけは哀れな事だと同情して下さらうと思ひ、書きつけた。

○せうと 兄をも姉をもせうとと調ず。こゝは姉新中納言を指す。
○さる人 立派なる人。藤原定家卿なり。
○あやしき歌 怪しき歌、拙き歌、つまらぬ歌。
○あながち 強ひて、つとめて。
○子を思ふ鶴 燒野の雉子夜の鶴などいひて、鶴は子故に身を忘るるといへば、阿佛尼を親鶴に喩へたるなり。
○文の詞につづけて 文章の中に歌をつづけて、文の詞のやうに書けるなり。
○なほざりならず 用意周到。
○それ故に 子の爲にと思へばこそ。
○蘆田鶴 鶴は蘆間に多くおり居るものなればかく云へり。田に下る故に田鶴といふ。
○聞ゆ 申上ぐるといふ敬語。
その序に、故入道大納言、草の枕にも立ちそひて、夢に見えさせ給ふ由など、この人ばかりや、あはれとも思さむとて、書きつけて奉る。
都まで、語るもどほし、思ひねに、

「亡夫爲家を戀ひ慕ふあまり思ひ寝の夢にも見ましたが、その夢の名残を、都までお知らせするのと思へば甚だ遠いことである。」

「亡き夫が旅寝の夢の中に迷つて来て、あの懐しい佛を見せてくれますが、夢が覺めれば、その面差は消え失せて仕舞ひますあゝ夢ばかりはかないものは、御座いません。」

などと書いて差上げたのに、又強ひて便りを尋ねて返事を奇越された。あれ程迄に平常御自分の歌を人に云さぬといふのも場合によるのであると思はれる。「東國の旅の空と都とは、遠く隔つて居りますが、かやうに古人の夢の事まで語り合へば、至

つて近い様に思はれます。」
「斯ういふ悲しい時なので、一層亡き夫の君を戀ひ慕はれる御身の御心を尋ねて、故大納言の佛は、何處からまア、現はれ來られるのであらう。」
などと被仰つた。

【新釋】 夏の内は不思議な程、音信も絶えたので、心配も一通りでなかつたが、都の方は、比叡山や三井寺に騷擾のあつた爲めであると聞いては、益々心配である。漸く八月二日になつて

忍ぶ昔の、夢の名残を。
はかなしや、旅寐の夢に、迷ひきて、
覺むれば見えぬ、人の面影。
など書きて奉りしを、又あながちにたより尋ねて、
返り言し給へり。さしも忍び給へりしも、折柄なりけり。

東路の、草の枕は、遠けれど、

語れば近き、いにしへの夢。

何處より、旅寐の夢に、通ふらむ、

思ひおきつる、露をたづねて。

などのたまへり。

【語釋】 ○故入道大納言 亡夫爲家卿をいふ。

- 立ちそひて 立ち、語勢を添ふる詞。添ひての意。夢に枕頭に現はるるをいふ。
- よしなど いはれ、譯柄など。
- 思ひね 人を思ひて寝るをいふ。故爲家を思ひつづけて眠れるなり。
- 忍ぶ 思ひ出すこと。
- 夢の名残 現世の夢の如き名残と、實際の夢の中の名残とを兼ねたり。
- はかなしや 脆きこと。やは感歎詞。
- 人の面影 亡夫爲家の姿。
- 迷ひきて 髮髻として夢の中に現はれ來りての意。
- あながち 強ひて、便りを求めての意。
- さしも忍び給へりしも さしもはあれ位、それ程にも意。怪しき歌といひて、あれ位包み秘し給ひし事も、時折事柄によると見えるの意。
- 思ひおきつる露 おきは露をいはんための縁語。露は旅に縁ある語。

夏の程は、あやしきまで、音づれも絶えて、
東なさも一方ならず。都の方は、志賀の浦浪立
ち、山、三井寺の騷擾なご聞こゆるも、いとど覺
束なし。辛うじて八月二日ぞ、使待ちえて、日頃

待ちに待った使者が着いたから
長い間滞つて居た人々の手紙を
取揃へて見た。

【新釋】 侍従の宰相の美のこ
ろから、五十首の歌を詠んだと
いつて、清書もせずにそのまま
送り越された。歌も大層上達し
た様だ、其内、十八首同感に思

より置きたりける人々の文ども、
取集めて見つ
る。

【語釋】 ○あやしきまで。不審なる程。不思議な位。
○志賀の浦浪立ち。志賀の浦は近江の志賀に在り。浪立ちは騒動あるを
いふ。

○山、三井寺の騒。山は比叡山延暦寺、三井寺は單に寺とも云ひ園城寺
のこと。即、弘安元年五月十二日、延暦寺及三井寺の僧徒等、神輿を擁し
て、京都に亂入せる騒動をいふ。帝王編年記に、弘安元年五月十二日巳時
日吉神輿三基入洛、是依三園城寺金堂供養一也、十六日、日吉神輿各歸坐
とある是なり。
○覺束なし。氣づかはし。
○辛うじて。漸くのことにて。

卅六、爲相の歌

侍従の宰相の君の許より、五十首の和歌をよみ
たりけるとて、清書もしあへず、下されたり。歌
もいどをかしくなりにけり。五十首に、十八首

はれるのがあるのも、不思議に
思はれ、つまりは子を思ふ親の
怨目から、さう見えるのであら
うか。その中に、
「心許りは母君の御側をかけ隔
てて居らぬと言つても、御身は
旅の山路の重なつて、白雲の立
ち迷ふ遠い彼方に居られる事な
れば、如何んとも詮方が御座い
ませぬ。」
といふ歌を見るに、旅なる此身
を思ひ忍んで詠んだにちがひな
いと、あはれに思ふたから、其
の傍に小さい文字で、返事を書
き添へてやつた。
「空なる白雲が、朝夕に遠方へ
行き還るは、たとひ身は遠く隔
つて居ても、そなたを戀ひ慕ふ
心を連れ添つて、遠い空に行き

點合ひぬるも、あやしく、心の闇の僻目こそあ
るらめ。その中に、

心のみ、へだてずども、旅衣、

山路かさなる、遠方の白雲、

どある歌を見るに、旅の空を思ひおこせて、よ
まれたるにこそはど、心をやりてあはれなれば、
その歌の傍に、文字小さく返り言をぞ書き添へ
てやる。

こひしのぶ、心やたぐふ、朝ゆふに、
行きては返る、遠方の白雲、

又同じ旅の題にて、
かりそめの、草の枕の、よなよなを、

通ふのであらう。」
 又同じ旅といふ題で、
 「こゝ一寸ばかりの旅寢でも、
 夜毎々々に母上の旅の辛さを思
 ひ遣れば、涙に袖がしめりま
 す。」とある處にも、次の様に返
 歌を書き加へた。
 「秋の草深い中に、鈴虫が聲ふ
 りたてて鳴くやうに、私は都に
 残して来た可憐な兒等を思ひ忍
 んで旅の宿で泣いてゐるのであ
 る。」
 又、此五十首の歌の終に、大凡
 に、詠歌の心得などを記しつけ
 て、更に其次に、故人爲家の歌
 を記した。
 「これを見たなら、如何なる感
 想に打たれることであらうと思
 ひながら、此の世を去つた親人

に代つて、自分こそ打ち泣かれ
 ることである。」
 と書きつけた。

どある處にも、また返り言をぞ書きそへたる。
 秋深き、草の枕に、われぞなく、
 思ひ遣るにも、袖ぞ露けき。
 又、この五十首の歌の奥に、詞を書きそふ。大
 歌のさまなど記しつけて、奥に昔の人の歌
 これを見れば、いかばかりかと、思ひつる、
 人に、代りて、音こそなかるれ。
 と書きつく。

【語釋】○侍従の宰相 宰相は大臣の唐名なるが、参議は朝政を参議す
 ること、大臣の如くなれば、殊更に参議の唐名としたるならんか。侍従は
 多く参議の兼ぬる所にて、爲相も参議にて侍従たりしなり。
 ○清書 下書を幾度もなして後、清く書くこと。淨寫したるをいふ。

○をかしく 心になひてうれしきをいふなり。
 ○點合 よき歌に點を引くをいふ。同意して點をうてる意。今合點する
 といふ語あるもこれより出でたるなり。
 ○あやしく 奇怪、不思議。
 ○心の闇の僻目 心の闇は子を思ふ心の闇にて、後撰集兼輔「人の親の
 心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」といへる歌の意によれ
 り。僻目は間違ひたる見方、見過り。
 ○思ひおこせて 俗によこしてといふに同じ。
 ○心をやりて 思ひやりての意。
 ○たぐふ 副の字の義。連れ副ふ、立ち副ふ、副ひ並ぶ意。
 ○かりそめの草の枕 暫時の旅行。假に苜をかけたなり。
 ○袖ぞ露けき 袖や袂が涙に濡ること。露は草の縁語。
 ○秋深き云々 ふりすては子供を残し去れるに鈴虫の鈴を振るに言ひか
 け、音とつづけたなり。秋、なく、草、みな鈴虫の縁語なり。
 ○昔の人の歌 爲家の歌。
 ○これを見れば云々 この歌を見れば如何に悲しからんと思ひたる人に代り
 て、今は己が悲しく泣かるといふ意。この歌は爲家の在世中或人の親な
 くなり、後に歌よむ様になりたるに詠みてやりたるを、似つかはしければ

【新釋】侍従の弟爲守の君からも、三十首の歌を寄越して、それに點をつけ、もし悪い所があつたなら、詳しく記して下さいと云つて来た。爲守は今年十六才である。兎に角、歌の口調になつて居ると殊勝に思はれるがこれも矢張、親の慈目からと他人には恥かしい次第である。これも、旅の歌には、此身の上を思つて詠んだことと思はれる。鎌倉下向の日記を贈つてやつたが、それを見て詠んだのであらう。

此所にかゝげたるならん。こゝは阿佛尼が、故爲家卿に代りて、爲相の歌を悲しく思ふよしに、とりなしたるなり。

卅七 爲守の歌

侍従の弟、爲守の君の許よりも、三十首の歌を贈りて、これに點合ひて、わろからむ事を、こまかに記したべどいはれたり。今年十六ぞかし。歌の口なれば、やさしく覺ゆるも、返す返す心の闇ど、かたはら痛くなむ。これも旅の歌には、こなたを思ひて、よみたりけりど見ゆ下りしほどの日記を、この人々の許へ遣したりしを、よまれたりけるなめり。

立ち別れ、富士の煙りを、見てもなほ、

「母上は住み馴れた都の空を立ち別れて、遙々とお下りになる道中に於て、富士の峯より立ちのぼる細い煙をお覽になるにつけ、どれ程心細く思はれる事でありませう、御察し申しまする。」

又これにも返しを書きつけた。

「暫の間立ち別れて居ても、子を思ふ母の思ひの切なさは、燃え立つ富士の煙となつて細く歸くのであらう。」

心細さの、いかにそひけむ。
また、これも返しを書きつく。

かりそめに、立ち別れても、子を思ふ、
思ひを富士の、煙とぞ見し。

【語釋】○今年十六ぞかし。今年、弘安元年なり。十六とは爲守の年なり。されど當樂記といふ書に、爲守、嘉曆三年十一月八日年六十四にて没すとあり。これによりて算ふれば、弘安元年は十四なり、諸本十六とあるは誤なるべし。

○歌の口。歌の詠みはじめのこと。

○やさしく覺ゆる。うれしく可愛ゆく覺ゆるなり。

○かたはら痛くなむ。この下にある、覺ゆるなどの詞を入れて見るべし。

○心細さ。傍に觀るさへ笑止なりといふ事。笑止千萬。

○なめり。なるめり、なむめりの略。推量。

○子を思ふ云々。子を思ふ熱烈なる胸の思が富士の煙として、立ち上ると見えしとなり。おもひのひに火をかけたなり。

【新釋】又、彼の權中納言の君は、細密に消息を書いて、
 「鎌倉御下向の後は、歌よむ友もなく、秋になつては、一入御身が慕はしく思はれるによつて、一人で寂しく月を眺めあかして居りまする」など云つて、
 「なつかしい東路の空を眺めて居れば、種々と昔の事が偲ばれて、こぼれ出る涙に、形見と思ふ月影さへ、曇つて見えぬやうになつて仕舞ふわい。」
 此返事には、故郷の戀しいことなど書いて、左の一首を添へた。
 「あなたから、こなたの空が戀しい事を云ひ寄越されたが、私も亦都の外なる鎌倉の月を見るにつけ、懐しい故郷の空が偲ばれまする、さても、この同じ眺

卅八、同じながめ

又、權中納言の君、こまやかに文書きて、「下り給ひし後は、歌よむ友もなく、秋になりては、いとど思ひ出で聞ゆるままに、獨月をのみながめあかして、」など書きて、

東路の、空なつかしき、かたみだに、

忍ぶ涙に、くもる月影。

この御返事、これも故郷のこひしさながかきて、

通ふらし、都の外の、月見ても、

空なつかしき、同じながめは、

都の歌ども、この後多く積りたり。又書きつくべし。

めは、あなたと私の心に通ふらしく思はれます。」
 都から來た歌などが、この後も多く積つた。
 折があつたら、追つて書きつけるとしよう。

【新釋】我が大日本帝國は、天地開闢の大昔、天照大神が御弟須佐之男尊の荒々しき御振舞を憤られて、天の岩戸にお隠れになつた時、群神合議の結果、興味津々たる神樂歌を謡つて神慮を慰め奉つた。かくて再び天日を仰ぎ見る事が出来るやうになつたのである。これが即ち倭歌

【語釋】○權中納言の君、爲教の女、爲子のこと。

○下り給ひ、關東に下り給ひ。

○思ひ出で聞ゆ、聞ゆは敬語。思ひ出で申すと云ふ程の意。

○かたみだに、形見と思ふ月影までも。

○通ふらし、わが物思ひての歎きと、御身の御歎きとは似通へるやうな

りとの意。

○ながめ、つく／＼と物思ひすることに眺むる意も兼ねていへり。

○又書きつくべし、何れまた折あらば書き記さむとなり。

卅九、長歌

敷島の やまどの國は 天地の

開けはじめし 昔より 岩戸をあけて

おもしろき 神樂の詞 謡ひてし

【語釋】○敷島の、やまどの枕詞。大和國磯城郡にある地名にして、上古久しく、皇居を置き給ひしかば、大和の枕詞となり、後には日本全體をやまといふより、その上にも冠らせていふに至れり。
 ○やまどの國、日本全國をいふ。

の起源なのだ。

【新釋】 されば、和歌といふものは、尊く目出度い事例となつて、これによつて、祖宗以來、歴代聖明の御政道も顯著になつた。又和歌は、人の思想を種として、世上萬事を詞に表現したものである。それ故、この至善の聲には人の目には見ることの出来ぬ、不可思議な鬼神をさへ感動させる事が出来る。これが即ち和歌の功德である。

【新釋】 大八洲國の内は勿論、四海何處の果ても立つ波靜かによく治まつて、空吹く風もそよ

よよと吹き渡つて、枝を鳴らす様な事がなく、降る雨も五風十雨と順調にいつて、天下平穩無事であれば、歴朝の天子は撰集に就いて大詔をお下しになる。この勅命を受けた人々は聖旨に従つて、和歌の浦に藻鹽草を掻き集めるやうに和歌集を撰んで奉つた例は多い。

【新釋】 就中父子三代まで相繼いで有難い勅命を蒙つて名望一世に高かつた家の子が、親爲家の特別な恩愛を被つて所領細川の莊を譲り受けたその其實證さ

○天地の開けはじめ 神代記にある天地開闢のこと。
○岩戸をあけて云々 天照大神の隠れ給ひし天岩戸をあけ奉り、諸神面白をかき神樂の歌をうたひて、大神を出し奉れるをいふ。
○詠ひてし 句を隔てて、ためしとてにかけて見るべし。

されば畏き 例どて ひじりの御代の道しるく 人の心を 種として 萬のわざを 言の葉に 鬼神までも 靡くめり

【語釋】 ○ひじりの御代 よく治まれる聖代の意。
○人の心を種として 以下五句は古今集の序文に、「やまと歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。中略」力をも入れずして、天地を動し、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ云々」とあるによりて書けり。
○めり 見えありの約にて、物事がその様に見えるると推測していふ詞。

八島の外の 四つの海 波も靜に 治りて 空吹く風も やはらかに

枝もならさず 降る雨も 時定まれば 君君の 御言のままに 從ひて 和歌の浦路の 藻鹽草 かき集めたる 跡多し

【語釋】 ○八島 日本國の事。八洲ともかく。即、今の本洲、四國、淡路、九州、壹岐、對馬、隱岐、佐渡をいふ。
○四つの海 四方の海といふこと。四海。
○空吹く風もやはらかに云々 王充論衡に、「風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊、五日一風、十日一雨」と見ゆ。天平泰平なる象とす。
○君君 歴代の天皇を申す。
○和歌の浦路云々 勅撰和歌集の先例多きよしをいふ。

それが中にも 名をどめて 三代までつぎし 人の子の 親のとりわき 譲りてし その誠さへ ありながら 思へばいやし

へ持つて居りながら、其謾狀の通りにならぬといふのは何うした譯であらう。思ひ廻せば自分のやうな品賤しい母の腹から生れた子供(爲相)であるから、其咎で斯様に宿福の拙いのであらう。亡夫爲家が「朝廷に仕へ奉れよ、又生計の費にも充てよ」と固く契約して置かれた、播磨國、須磨と明石の地續きなる細川の莊によつて、僅に露命を繋いで來たのに、その莊園は爲氏の爲め理不盡にも押領されて仕舞つたから、他に收入のない身の悲しさは、日々窮渴に迫つて今日では水を離れて陸に上つた魚のやうに、梅緒の切れた船のやうに、如何していゝか途方に暮れて、因無し切つて居る。そこ

信濃なる そののははき木の そのはらに
種をまきたる どがどてや 世にも仕へよ
生ける世の 身を助けよと 契りおく
須磨と明石の つづきなる 細川山の
山川の わづかに命 かけひとて
つたへし水の 水上も せきどめられて
今は唯 陸に上れる 魚のごと
楫緒絶えたる 舟のごと 寄る方も無く
わびはつる 子を思ふとて 夜の鶴
なくなく都 出でしかど 身は數ならず
鎌倉の 世の政 繁ければ
聞え上げてし 言の葉も 枝にこもりて

で、夜の鶴の子を慕うて鳴くやうな辛い思ひをしながら、涙と共に都を出て遙々と鎌倉へ下つたのであるが、元來自分の身は卑賤極まりないものでもあり又鎌倉幕府の政事が、頗る繁忙であつたから、訴訟の事項も、梅の蕾が枝の間に籠つて春になつても咲かぬがやうに、遅滞に遅滞を重ねて、四年目の春を迎へるやうになつた。

梅の花 四歳の春に なりにけり

【語釋】 ○三代までつぎし 俊成、定家、爲家の三代相續ぎて、勅撰集の撰者となれるをいふ。
○その誠さへ 爲家が真心ありて興へたる意と譲りの實證ある意とを兼ねていへり。
○おもへばいやし云々 思へば賤しき母の腹に、生れたる子なればと卑下していへるなり。いやしは、筈木、齒原にかゝる。齒原は信濃國下伊那郡にあり、その附近に筈木といふ木あり、遠くより望めば、筈の形したれど、近より見れば、何れが筈の形したりとも見えずといふ。筈木に母をかけ、齒原にその腹をかけ、子を持ちたるを、種を蒔くといへるなり。
○世にも仕へよ 爲家の遺訓なり。代々の帝にも仕へ奉れ、生活のためにもせよと約束せられたりとの意。
○須磨と明石 澄みて明かなる意をかねたり。
○細川山の云々 領地細川の庄をいふ。山川といはんためにかく書けるなり。かけひは懸樋にて、水を通ずるもの、命をかくるを、懸樋に云ひかけたなり。山川にも、水にも縁あり。
○つたへし水の云々 懸樋の縁より水をひき、領地を故なく押領せられたるをせきとめられと喩へたり。

【新釋】この訴訟事件が何時終局になるか解らぬ中に、月日はやく経つて行く。何處ともなく中空を吹く風に任せてある故郷の家は、年々に軒端も荒れて蜘蛛の巣が一面にかゝつて、嘸かし荒廢してゐるだらう。それは兎も角、世々傳へて來た貴い

○陸に上れる魚云々 掛緒絶えたる船共に、子孫の困苦を示さんためにいへり、これも水の縁なり。
○寄る方もなく たる方もなくの意。掛緒絶えたる船の縁語なり。
○夜の鶴 子を思ふ故に、夜の鶴の如く、なくなく都を出て、鎌倉に訴へ來りしかどといふ意。夜の鶴はなくなくといふ詞を出さん爲めの序。
○身は數ならず云々 我身は數ならぬ賤しき者なる上に、鎌倉幕府の政事繁忙を極め居れば、申立てし訴訟も其儘になりて、未だ解決せず、ここに四年を経て、弘安三年の春となれりといふ意。言の葉より、枝にこもるといふ詞を生じ、幕府の優柔不斷を喻へて、更に梅の花より春といふ字を生み出せり。しげければ葉にかゝれるなり。

行くへも知らぬ 中空の 風にまかする
故郷は 軒端もあれて ささがにの
いかさまにかは なりぬらむ 世世の跡ある
玉章も さて朽果てば あし原の
道もすたれて いかならん 是を思へば

歌書歌稿などが、散佚紛亂したら一大事である。これによつて和歌の道でも廢れて仕舞つたら、まあ何んとしたものであらう。此事を思へば只單に一身一家の悲歎のみではない。實に國家の爲にも容易ならぬ不幸の出來事となりゆくであらう。

【新釋】亡夫爲家が將來の事迄も慮つて、種々と書き遣された筆の證跡は、正しく現存して居つて確實なものであるが、若し虚偽であると思ふならば、理非を糺すといふ神様の裁判にかけて見れば、直に其の眞偽のある

わたくし 歎きのみかは 世の爲も
つらき例となりぬべし

【語釋】○行へも知らぬ中空 中空を吹き渡る風の行方のさだかならぬが如く、この願意、何時聞き届けられむと心許なき意を喻へたり。
○ささがに 蜘蛛の枕詞なること前に述べたり。ここは蜘蛛の義に用ゐて、いにかゝらしめたり。いは蜘蛛の巣をいふ。軒端も蜘蛛の縁語。
○世世の跡ある玉章 代々相傳の歌書をいふ。
○あし原の道 敷島の道といふに同じ。和歌の道のこと。
○私の歎き 一身一家の歎き許りか、和歌の道のすたれむには、廣く世人の迷惑となるべしとの意。

行くさきかけて さまざまに 書き遣されし
筆の跡 かへすくも 偽りと
思はましかば ことわりを 糺の森の
ゆふしでに やよやいささか かけてとへ

【語釋】(行くさきかけて 前途を慮りて細々と書き残せる筆跡といふ

所が分ることであらう。

【新釋】 人義廢れ道徳後を拂へるが如き末世には、道も明らかでないから、蓬のやうな悪人が勢を恣にして、麻のやうな良民は跡もなく遁げ去ると云つて、北條泰時は「世の中に麻は跡なくなりにけり心の儘の蓬のみして」と詠んで世人を警戒して置

意にて、爲家の遺言状などをさす。
○かへす云々 斯く事實分明なるものを、重ね重ね偽りと思ふ人あらばといふ意。
○ことわり 道理。
○糺の森 山城國愛宕郡にあり。下賀茂の神社の在る所なり。修理を正すに言ひかけたなり。
○ゆふして 木綿垂てなり。古へ玉串、櫛、注連などに木綿を垂てかけたり。木綿は、今のモメンにはあらず、楮皮を織維として織れる布なり。今は紙にて作る。しては懸けて垂らす故、下にかけてとへに云ひかけたり。
○やまや 感歎詞にして、他を呼びかくる詞。
○かけてとへ 心に懸けて、味ひ見よといふ意。

みだりがはしき 末の世に 麻はあどなく
なりぬごか いさめ置きしを 忘れずば
ゆがめる事を 又誰か ひき直すべき
とばかりに 身を顧みず 頼むぞよ
其の世を聞けば さてもさは 残る蓬と

かれた、其の調誠を忘れなかつたならば、誰か正を邪と見過つて邪に同意を表するものがあらう。して見れば自分の訴は道理であると公平な判決を下されるであらうとばかり思ひ込んで、身の卑賤をも顧みず、鎌倉まで来たのも、幕府の正裁を頼みにしての事である。さて又、昔の事を聞けば、俊成卿の女君が越部の庄の事に就いて、「残る蓬が數をことわれ」といふ歌を詠んで訴へた時の悲歎も、亦自分と同様の事であつたのだ。

【新釋】 その越部の庄と云ふ所

かこちてし 人の情も かかりけり

【語釋】 ○みだりがはしき 義理廢れ、道徳地を拂へるが如き末世をいふ。末の世は佛教の所謂末法の世。
○麻はあどなく 新勅撰集北條泰時が詠める歌に「世の中に麻はあとなくなりけり心のままの蓬のみして」とあるを指す。こは荷子勸學編に、「蓬生三麻中一不扶而直」とあるに依りて詠めり。悪人のみ榮ゆるといふ意。
○いさめ置きし 調誠し置かれた事をの意。
○ゆがめる事を云々 ゆがめる事は、曲れること。引直すは取直して正しとするなり。とばかりにはと思ひての意。
○身を顧みず頼むぞよ 卑賤なる身にもかゝはず、公平なる裁決を待ち頼み居るぞとの意。
○其の世を聞けば云々 昔の世の事を聞けばといふ事にて、昔、俊成卿の頃、其の女(實は姪)、播磨國越部庄を、受け領したるが、地頭屢々之を私したれば、「君一人あとなき麻のみを知らば残る蓬の數をことわれ」といふ歌を以て、北條泰時に訴へたる事あり。この事後の裏書に委し。参照せよ。かこちは不平を歎き訴ふること。かかりけりはかくありけりにて阿佛尼と同様の境遇なるをいふ。

同じ播磨の 境とて 一つ流れを

も播磨、細川の庄も同じく播磨の境内で、而も同じ家系の人でもあり、同じく歌道に携はつてもゐる。されば、心も清い野中の清水の暫時はかき濁つても再びもとの正しい心に立返つて呉れよ、自分の方には、確實な證據さへあることなれば、勝訴になるは疑ひない。その時こそは、歌道が益々興隆して、此處鎌倉の鶴が岡邊に、立昇る朝日の影も千代八千代の光がさし添はつて、御聖代がいや榮えに榮えますことであらう。

反歌

「君が代はいや榮えに榮えませと、朝に夕に祈願する心の中を、豫てから陳べようと思つて居つ

たが、今日こそ始めて和歌に詠じたのである。」

汲みしかば 野中の清水 よごむども
もどの心に 任せつつ 滞ほりなき
水莖の 跡さへあらば いとどしく
鶴が岡邊の 朝日影 八千代の光
さしそへて あきらけき世の なほも榮えむ
長かれど、 朝夕祈る、 君が代を、
やまと詞に、 今日ぞのべつる。

【語釋】 ○同じ播磨

一は越部庄、こは細川庄にて、共に播磨なり。

○一つ流 同じ系統なるをいふ。下の野中の清水云々に縁ある語にして、同じく歌道に携はるといふ意もあらむ。

○野中の清水云々

播磨國印南郡にあり。よどむは濁ること。爲氏の悪

しき舉動にたとへ、さて古今集に「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞ汲む」とあるを引用して、爲氏の本心にかへり、押領せし莊園を戻さむことを願へり。

○滞りなき水莖の跡 確實なる證書だにありたらばの意。

○いとどしく鶴が岡邊云々 鎌倉幕府の繁榮を祝ひたる詞。いとどしく

は愈々益々の意。鶴が岡は八幡宮なり。源氏の氏神。この岡に昇る旭日が、幕府の幾千代も榮ゆべき光を、あらはし示せるよしを云ひて、祝ひたるなり。

○明らけき世の云々 政道明らかに、善政成りて御代は萬々歳に續くならむとの意。

○ながかれと云々 朝夕君が代の、長かれかしと祈る心を、豫てより、陳べんと思ひ居たりしを、今日始めて、大和詞に、詠じたるなりといふ意。

さてこの長歌の後につけたる一首の歌は、反歌と云ひて、上の長歌の意を繰返して、約言したるもあり、又は長歌に云はぬ別の意を補ひて詠み添へたるもあり、又、長歌は古より五七調なるべきを、この頃よりは、多く七五調なり、この歌も始めは五字より起したれど、後は七五調となりたり、時代の影響ならむ。

次に掲ぐるは、日記の文にはあらで、後人が裏書によりて、書き添へしものなれど、本書を解くに便利なれば、記しおきたり。

残る蓬どかこちけるといふ所の裏書に、皇太后

宮の太夫俊成卿の御女、父の譲りどて、播磨國越部の庄といふ所を傳へしられけるを、地頭のさまたげ多くて、昔、武藏の前司へ、異なる訴訟にはあらで、まゐらせける歌、新勅撰にも入り侍るとやらん、心のままの蓬のみしてといふ歌を、かこちて申されける歌、

君ひとり跡なき麻のみを知らば
残る蓬が数をことわれ

とよまれければ、評定にも及ばず、二十一ヶ條の地頭の非法を、皆とごめられて候ひけり。その後、野中の清水を過ぐとて、
忘れぬもとの心のありがほに

野中の清水影をだに見し

とよまれたるも、その越部の庄へ下られける時の歌にて候。新勅撰に入りて侍りし。

永仁六年三月一日書之

【語釋】○裏書 卷物などの裏に、其の由来などを、書きたる文なり。
○緩本の奥書に同じ。
○皇太后宮の大夫 皇太后宮に仕ふる長官なり。三后の宮及び東宮は、長官を大夫、次官を亮といふ。其下に屬あり。
○俊成卿の御女 俊成は定家の父、爲家の祖父なり。御女は實は姪なり。
○越部庄 和名抄に、「播磨國榑保郡越部云々」とあり。
○傳へしられける しるとはわが物として領すること。父より傳へて領地とし治むること。
○地頭 源賴朝の時、大江廣元の建議により、始めて諸國の莊園に置きたる役。其職務は土地を管掌し、租税を徴取し、定例の租額を、莊園の有主に納むるにあり。又守護の點定に應じ、京都、鎌倉の大番役を勤め、部内に兇徒盜賊あれば、之を捕へて守護に交附すべき務あり。

○武藏の前司 鎌倉の執權北條泰時をいふ。前に武藏守たりし故にこの稱あり。

○異なる訴訟にはあらざりて 特別に、かどだちて、訴訟がましき様にはあらざりての意。

○新勅撰 後堀河天皇の貞永元年、藤原定家卿の撰したる歌集なり。

○心のままの蓬云々 新勅撰集十七に平泰時の詠める、題しらずとして

「世の中に麻はあとなかりにけり心のままの蓬のみして」とあるをいふ。

麻を善人に、蓬を悪人に譬へて詠めるなり。

○君ひとり云々 君は泰時をさす。君がかつて「世の中に云々」と詠み

し如く世間には悪人のみ多ければ、若し我身の正しきを知らば他の悪人(地頭)の罪を正し給へといふ意。ことわるは善悪を分つこと。

○評定 多衆にて論難評議して是非を定むること。

○非法 無法。不義の所業。

○わすられぬ 忘る可からざる本心のあるらしく、昔、あれ程非法を働

きし地頭共も、其後は、水に人の影の映りて見ゆるやうに、少しは正しく

清き心にかへれりといふ意。影をたに見しは水のすみたる故影さへ見たりとの意。野中の清水にたとへて、地頭の非法のやみたるをよろこび詠めるなり。

○新勅撰 龜山天皇の文永二年に撰びたる、續古今集の誤なり。

○永仁六年云々 此の日記を傳寫したる時の年月日なり。弘安三年より十八年の後。

この文も同じく亦後人の書き加へしものなり。

此の阿佛房と申す人は、定家の息爲家の室なり。

公達五人ましまし候。播磨國細川の庄を、爲家

より譲りおかれ候を、爲氏、他腹によりて、押

領候。訴訟の爲めに、鎌倉へ下られ候時の、道

の日記にて候。爲氏も、陳狀の爲に、鎌倉へ下

向、兩人共に、鎌倉にて死去せられし。訴訟は、

爲氏の方へは、つけられず候ひしとぞ。阿佛は、

安嘉門院の西條と申す人なり。爲相の母なり。

【語釋】○阿佛房 阿佛尼のこと。房とは僧の居所。坊といふに同じ。室の意より轉じて僧尼を直接に指す。

○室。内室。奥方。
 ○公達。君たちの音便。大臣大将の子の、中納言に至れるものをいふ。
 爲相は中納言なれども父爲家は大納言までのぼりて、大臣大将とはならず、
 されど藤氏は名門なれば、かく敬稱したるなるべし。
 ○他腹。腹違の子。異腹。爲氏の母は宇都宮頼綱の女なり。
 ○道の日記。道中の日記。旅日記。
 ○つけられず。訴訟は爲氏の敗となれるをいふ。

十六夜日記詳解終

大正六年三月廿八日 印刷
 大正六年四月一日 發行

十六夜日記詳解
 定價金貳拾五錢

著者 城戸茂種

發行者 齋藤英一郎
 東京市本郷區本富士町貳番地

印刷者 村田豊吉
 東京市京橋區新榮町五丁目七番地

印刷所 大倉印刷所
 東京市京橋區新榮町五丁目七番地



發行所

東京市本郷區本富士町貳番地
 振替口座東京二五三四五番

玉英堂書店

大 賣 捌

東京市 神保町區	東京市 神田區 保町二區	東京市 日本橋區 物部町
東京堂	精文館	六合館

文學士

尾上柴舟先生閱

藤森花影先生著

(增補十一版)

徒然草詳解

美本全一冊
紙數四百三十餘頁
定價金五拾錢
郵税金六錢

徒然草は日本文學の異彩として、世既に定評あり、本書は著者が多年の苦心になれるもの、註解懇切にして精細を極む、一讀悉く大意と詳解とを合せ得らる可し、而して世評は本書を類書中の白眉なりとて、好評湧くが如く、實に學生諸君の國語、受験用、自修用として缺く可からざる良書なり

内容

各段毎に本文・大意・註釋・語釋と分ち尙卷末には徒然草より引用せられたる各官立學校入學試験問題を輯録して受験者諸君の便に供す

發行所 東京市本郷區本町三丁目五番地 玉英堂

城戸茂種先生著

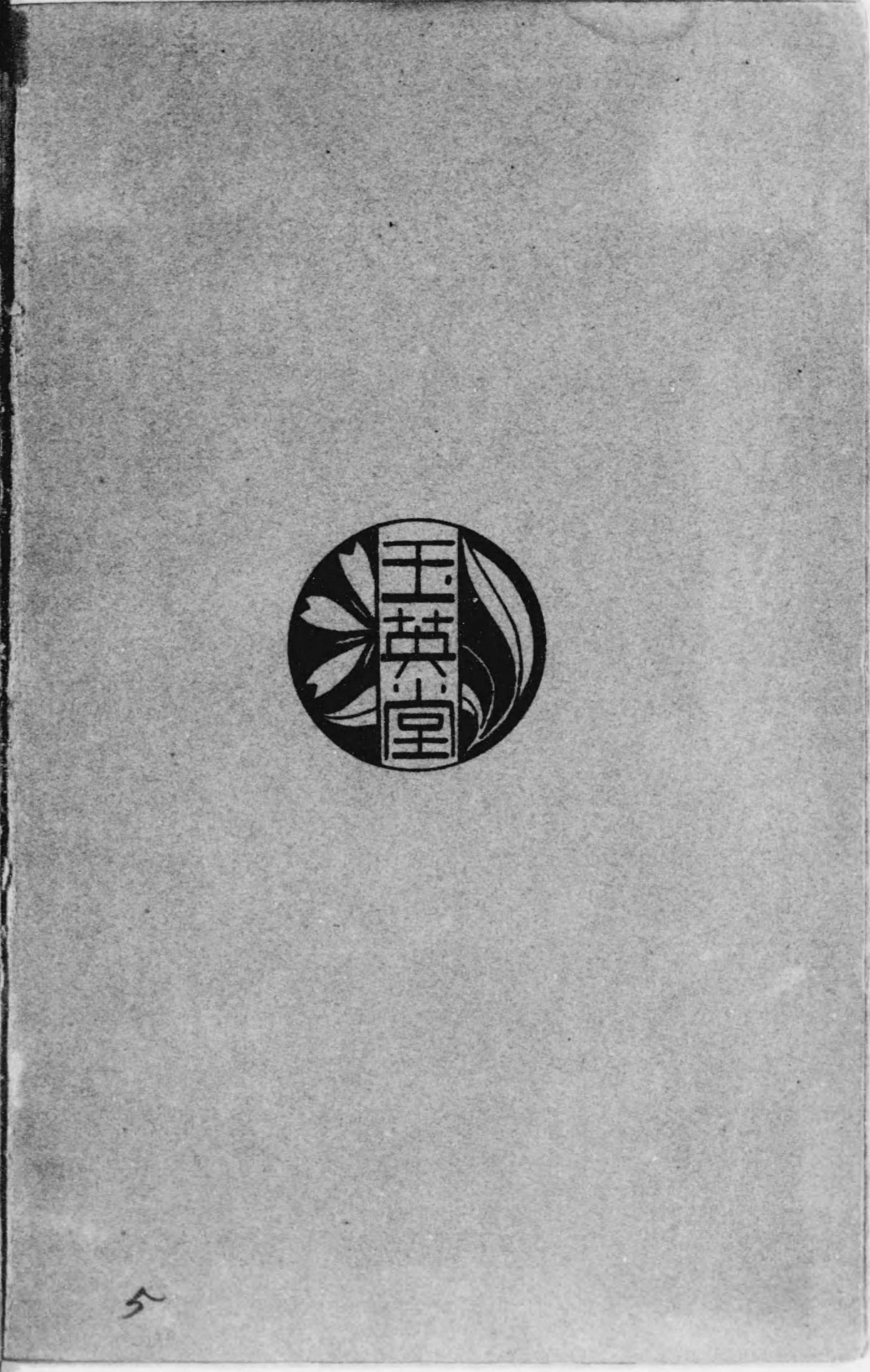
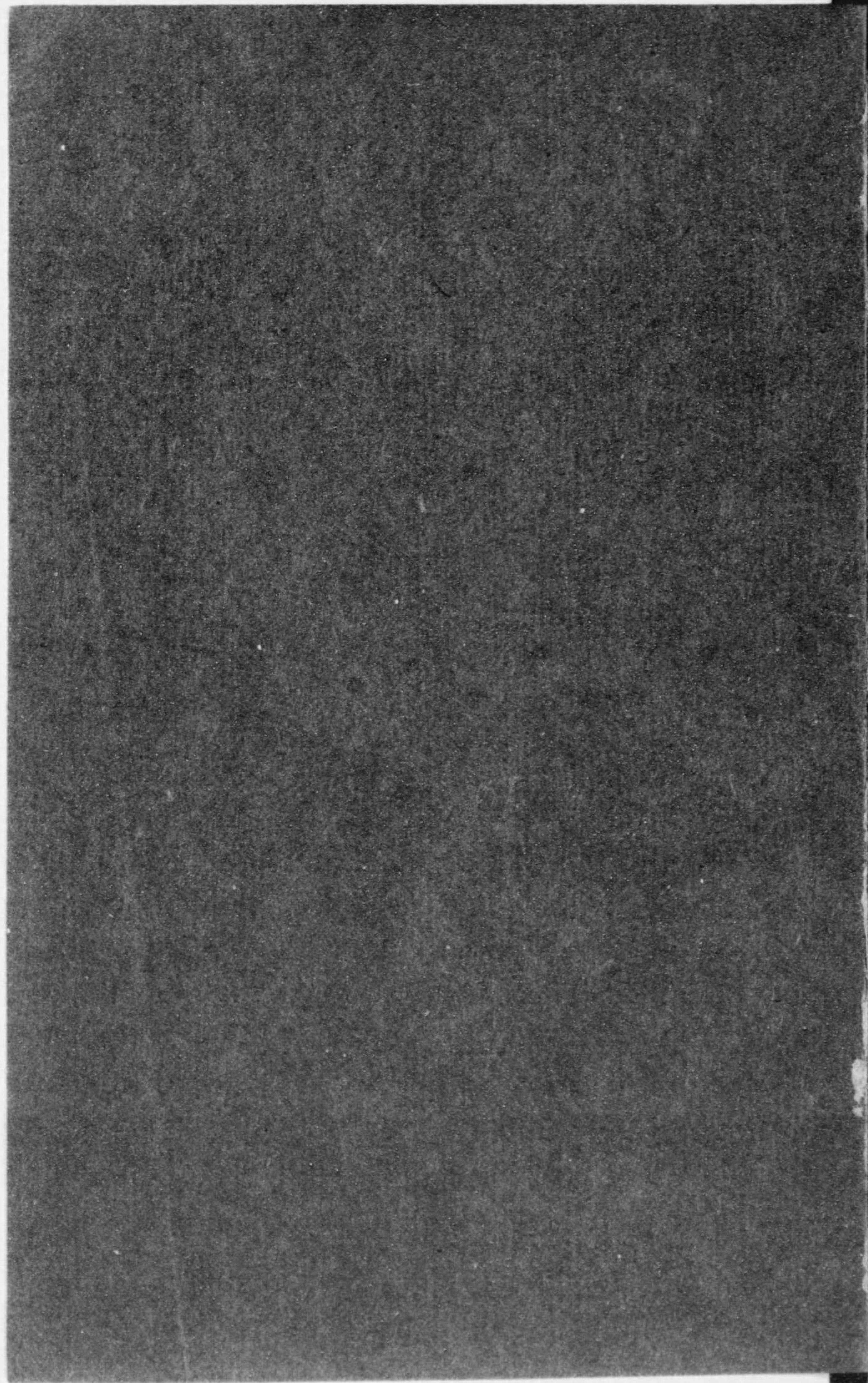
(好評四版)

新刊 方丈記詳解

美本全一冊
紙數百餘頁
定價金貳拾五錢
郵税金四錢

方丈記は一代の高士、鴨長明の著にして、實に鎌倉時代の國文學を代表せる模範的の一大美文なり、本書は本文の傍に、正確詳密なる解釋を附し、尙原文の妙味を損はずして之れを現代の口語に移したる新譯を添ふ、眞に現代的新釋として多くの類書を壓す、されば中學上級生は勿論受験生諸子、並に國語研究者必讀の良書なり、

發行所 東京本郷區本町三丁目五番 玉英堂書店



5

339
902

終